

朝比奈まふゆはブラコン  
である

エクソダス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もしもまふゆに弟がいたら

# 目次

傍観者のセカイ	参	1
傍観者のセカイ	二	20
傍観者のセカイ	壹	44
九		69
八		92
七		108
六		139
五		157
四		183
三		200
二		221
一		261

凡人様	1
傍観者のセカイ	4
「コラボ	Y
M	*
ym様	261
	237



「それじゃあ、今日も一日お疲れ様、かんぱーいっ！」

「乾杯っ」

辺りが暗くなった夜頃。

いつものファミレスにて瑞希の音頭に合わせ、四人は持っていたガラスのコップを打ち鳴らした。

「さっ、食べ物注文しよ注文っ。メニューは……」

「どうせ頼むのはポテトでしょ？」

「むー、それはそうなんだけどさ絵名。なんかいつつもここ来るんだからちよつとは冒險したいじゃん？」

絵名のぼそつと言う言葉に、瑞希はむすつとした表情でメニューを睨んでいた。

「何なら私が決めてあげましょうか？」

「いいよう、どうせ絵名が決めると映えの奴頼むんだから……」

「なによ、悪い？」

「別に悪くないけど……。写真撮るの長いんだよっ」

「そんなことないわよ。というか瑞希は猫舌なんだから、冷めてから食べるでしょ？  
結果オーライじゃない」

「映えを正当化しないっ！ 奏とまふゆは何か食べたいの無い？」

と、瑞希は先ほどから口を開いていない二人に話題を振る。

「わたしは……特にないかな」

「私も、頼んでも味わかんないし」

いつも通りの二人に、絵名と瑞希は肩を落とした。

「アンタらねえ、もうちよつと盛り上げようって気持ちにはならないわけ？」

「よくわからない」

「出たっ、まふゆの常套句」

「わたしは、自分から盛り上げるのは苦手だから」

目をそらす姿に、絵名は大きいため息をついた。

「はあ……、それなら。少しでも盛り上がろうと打ち上げの写真をSNSに投稿でもしてみたら？　そういう気分になんかはなるかもよ？」

「あー、自分の入った沼に落とそうとしてるう？」

「人聞き悪いわね！」

そんな二人の会話を聞きながら、まふゆは無表情ながらも考え込んだ。

「……まあ、写真くらいなら」

なんとなく気分が乗ったのか、まふゆはスカートのポケットからスマホを取り出そうとする。

が、

「……………?」

「……………まふゆ、どうしたの?」

いつもと違うまふゆの行動に気づき、奏は静かな声で問いかける。

「スマホ、忘れたみたい」

「……………珍しいね、そんな凡ミスするなんて」

奏は少し驚いた。

なぜなら、まふゆは基本的に完璧超人で、このようなミスをほとんどしない人間だからだ。

「ないならないで良いけど」

まふゆは早々にSNSの投稿を諦めようとした。



次の瞬間、

——……待ち合わせ、です。

まふゆにとっては聞き慣れた声が聞こえ、その声の主がこちらの方に近づいてくる足音がした。

そして、瑞希達の目の前で立ち止まった。

「……………」

「え、ええっと。何か」

突然来た少年に驚きながらも対応する絵名。

歳は中学生くらいだろうか。美しい紫髪はかなり小柄な少年で、人目では女の子と誤認してしまいそうなほど童顔な瞳をしていた。

すると突然、まふゆが立ち上がった。

「……………なつき」

「忘れ物」

まふゆになつきと呼ばれたその男の子は、手に持っていたスマホをまふゆに差し出した。

「どうやらまふゆのスマホのようだ。」

「ありがとう、なつき」

「どういたしまして」

まふゆはなつきに向けて小さく、本当に小さく微笑みを浮かべる。

その光景に、絵名と瑞希は目を見開いていた。

「まふゆ、その子は？」

最初にその疑問を聞いたのは瑞希だった。

瑞希はその場から立ち上がり、じろじろとなつきを凝視する。

「………見ての通り」

「いや、わかんないから聞いてるんじゃないの」

「……弟さんだよ、まふゆの」

紹介をしようとしなймаふゆに付け足すかのように紹介する奏。

「へーそつかなるほどくまふゆの弟君か」

「ふうん、弟ねえ」

「……………」

「弟お!」

瑞希と絵名の驚愕の声が見事に一致した。

その大きな声に驚き、なつきはビクツと身体を震わせた。

「……言ってなかったっけ」

「いってないわよ! 何で言わなかったの?!」

「言う必要なかったし」

「あははつ、まあ家族のことはあんまり喋らないからねえ」

盛り上がっている四人を見て、まふゆの弟——なつきは頭を下げた。

「姉が、お世話になってます」

「あつ、うんこちらこそ。っていうか、奏は知ってたみたいだね、まふゆの弟くんのこと」

「うん、前に会ったことがあるから」

「お久しぶりです、奏さん」

「礼儀正しい子じゃない。いつものまふゆと違って」

嫌みったらしくいう絵名に目もくれず、まふゆはなつきをじつと見た。

「……アンタ、ご飯は？」

「食べてないよ」

「じゃあ、ここで食べてったら」

「んっ、そうする」

姉の言葉に従い、ここで食事を取ろうと踵を返す。

「あーっ、ちよつと待つて！」

すると、何故か瑞希に止められた。

「せつかくだったら一緒に食べない？ 弟君の親睦も兼ねてさ」  
「？」

予想外の言葉だったのか、なつきは首を傾げた。

「良いよね。三人とも」

「私は良いわよ。まふゆの弟つてちよつと気になるし」  
「わたしも……それでいい」

瑞希の言葉に、絵名と奏は同意の言葉を出した。

しかし、姉のまふゆだけは、どこか苦い顔をしていた。

「……………」

「なによ、私達に弟は紹介したくないっての？」

「うん」

「あんたねえ！」

まふゆは怒っている絵名には目もくれず突然立ち上がり、なつきの前に立ったかと思  
うと、

ぎゅ——っ

「きゅっ……………」

なつきを抱きしめた。

「よくわからないけど、この子が女性と話すのは、いや」

（（……………ブラコン？）（（



「それにしても、姉様が僕以外の人と素で喋るなんて……興味深いです」

自身の姉がこの三人には素で喋っている事に、なつきは少なからず衝撃を受けた。彼にとってまふゆという姉は、表面上では優等生を演出し、本来の姿を誰にも見せない。

それは家族も例外ではなく、素を出してくれているのは自分だけだと思っていた。

「まあ、基本的にまふゆは優等生フェイスだからねえ」

淡々とフライドポテトを食べるなつきを見ながら、瑞希はヘラヘラと笑った。

「つていうかまふゆ、アンタ弟に『姉様』なんて呼ばせてるの？ はつきり言ってるのかと思うわよ」

「しらない、なつきが勝手に言ってるだけだし」

「本当にいい？」

「うん」

「じゃあ突然姉貴って呼び始めても良いんだ」

「それは嫌」

そんな中、奏が優しくなつきの肩を叩く。

「そういえば、なつき君は味わかるの？」

「いいえ、自分も味はわかりません」

フライドポテトを事務的に食べながら、なつきは問いに答えた。

「そっか、辛くない？」

「辛いとは思ったことはありません、味覚というのは娯楽の一種でしかありませんから。通常不便である理由にはなりませんよ」

「な、なんか。妙に達観してる子だなあ……」



小さな声でぼそつと呟き、瑞希は脂汗をかいた。  
しかしなつきは特に気にする様子もなく、水を飲む。

「……まふゆの弟って感じの子だよね」

「……奏、それどういういみ？」

「え、えつと。特に意味はない、かな」

無表情ながらも圧をぶつけてくるまふゆに、奏は苦笑いで返した。

「随分、仲が良いんだね。姉様」

「……そう見える？」

「うん、見えるよ」

「よくわからないけど、アンタがいうならそうかもね」

なつきからしてみれば、ここまでまふゆが本心を隠さない友達は初めて見る。

制服が違うので違う高校のようだが、一体どういう関係なのだろうか。

そんな事を考えていると、絵名がなつきをじつと睨んできた。

「絵名、うちの弟を睨まないで」

「別に睨んでないわよ失礼ね。ねえアンタ。もしかしてスイーツとか作る？」

「……？ ええ。まあ。多少なりとも」

「じゃあ、私と会ったこと、あるわよね？」

「……？ 貴女と？」

そう言われ、なつきは絵名を凝視する。

「……あつ、いつも木曜あたりに買いに来ます？」

「そうそう！ やっぱりあの厨房にいた子よね？」

「わあ、うちの常連さんだったんですね。気がつきませんでした」

何故か二人で盛り上がっているのを見て、瑞希が口を挟んだ。

「な、何何どゆことなの？」

「この子、私がよく行くスイーツ店で厨房の方にいる子なのよ。近くでは初めて見たか

「らすぐわからなかったけど」

「いつもご愛顧、ありがとうございます」

ぺこり、と頭をさげるなつき。

「へえ、おいしいの？」

「ええ、とつてもおいしい。多分世界に通用すると思うわよ」

「わあ、絵名べた褒めだね」

「わたしも、なつき君のスイーツ食べたことあるけど、おいしかった」

重ねて同意する奏の言葉に、瑞希は「へえ〜」と言葉をこぼした。

「ねえ、今度僕にもつくってよ。そんなにおいしいんならさ」

「姉様のお友達であれば喜んで」

そう言って、なつきはぺこりと頭を下げ、微笑みを浮かべた。

と、次の瞬間、

「なつき、そろそろ帰ろう」

「え……ひえっ」

まふゆは無表情ながらも、明らかに怒っている圧を感じた。  
まるで「逆らったら許さない」と瞳が言っているようだった。

「なんか、まふゆ怒ってる……?」

「さ、さつき弟がほかの女性と話すのは嫌だとか言ってたからね……。多分僕達と話しているのが気に食わなかったんじゃない?」

「びっくりするくらいブラコンじゃないあいつ……」

三人がごそごそと話していると、なつきは愛想笑いを浮かべた。

「わ、わかった帰ろっか」

「うん、みんな。そろそろ帰るから」

「お、おつかれ……」

□ □ □

突然だが、本来の姉弟関係の常識を確認しておこう。

普通だったら姉弟の部屋というのは別々だ。子供の頃は一緒かもしれないが、歳を重ねるごとに一人部屋がほしいと感じるようになる。

そして、仮にも同じ部屋だったとしても、ベッドは流石に別々だ。

もしベッドが一つしかないとしたならば、姉がベッドを使い、弟はソファやどこかで寝させるのが姉弟という物だろう。

「……………」

——ぎゅうううう。

しかし、だからなんだと言わんばかりに、まふゆは自身の弟、なつきを抱き枕にし、同じベッドで横たわっていた。

「ね、姉様。流石にそろそろ一緒に寝るのはやめない？ 恥ずかしいよ」

「嫌なの？」

「いや……ではないけど」

「ならいい」

まふゆの胸に顔が埋もれ、なつきは恥ずかしそうにしているが、まふゆは気にせず抱きしめたまま弟の頭を撫でる。

「なんで……この年にもなつて姉と一緒に寝なきやならないの……」

「……よくわからないけど。アンタといると、どうしても胸が『きゆう』ってなつて抱きしめたくなる。そう何度も言ってるはずだけど」

まふゆは感情には少々乏しいが、一つだけ我慢できない感情がある。それは、弟であるなつきを抱きしめたいという欲望である。

最初は意味もなく我慢もしていたが、どこかで歯止めがきかなくなり、一日一回は抱きしめないと落ち着かなくなっていた。

「アンタは私の弟、だから大人しく抱き枕になつてれば良い」

「……それ、誰のまね？」

? 朝比奈家の食卓。

朝比奈まふゆと朝比奈なつきは両親と共に夕食を食べていた。

「二人とも最近どう? 学校は」

「うん、楽しいよ。クラスのみんなもいい人ばかりだし」

母親の問いに、優しい口調、いわゆる『優等生』で答えるまふゆ。

そして、なつきは牛乳を飲んだ後、口を開いた。

「楽しいかはわからないけど幸せではあるよ」

「なつきは来年から高校生だろう? 勉強は上手くやっているか?」

「医者になりたいのよね。頑張ってるね。お母さんもお父さんも応援してるから」  
「うん、ありがとう」



いつも通りの両親に軽く言葉を返すなつき。  
そんな中、今度はまふゆが問いかけてきた。

「友達とはどう？ 上手くやってる」

「多分、問題が起こらない程度には嫌われてないよ。たまに勉強会みたいな事で教えた  
りもしてるし」

「……そっか、なつきがそれでいいならいいと思うよ」

そんな話をしていると、母親が口を挟んできた。

「——嫌だったら嫌って言うのよ？ どんな人とお友達かはわからないけど、教えても  
られないと出来ない子より、競える子と一緒にいた方が良いでしょう？」

「……………」

「そういう子と一緒にいると、自分も勉強になるもの。自分の時間を大切にしなさいね」

母親のそんな言葉に、なつきは数秒だけ固まった後——

「母さんは優しいね」

くすりと優しく微笑んだ。

「勉強が出来る友達がいたとして、それはそこまで特にならないよ。得をすることと  
言ったら、『受験戦争の競争相手の時間を潰せる』くらい……かな」

そんなことを言いながら、なつきは食べ終わった食器を片付ける。

「それに勉強は一人でやる物だよ。怠けた奴が負けて、努力した奴が勝つ。だから自分の勉強時間を削ってまで友達といようなとは思わないよ。たとえ勉強が出来る人でも……ね」

「なつき、あなた……」

「ああ勘違いしないでね母さん、勉強会で教えてあげてるのはただの自分の戒め。『こんな人たちみたいになってたまるか』『こんな人達よりもつと上に行く』っていうただの自

己満足、奮い立てなんだ」

「……そんなんじや、友達出来ないぞ?」

そんな父親のつぶやきに、なつきはまたくすりと笑った。

「そもそも僕は友達なんて作った覚えはないよ。勉強時間や家族の時間が削れるだけ」

その言葉に、そこにいる家族全員言葉を失った。

最近はいつもそうだ、彼の考えがどんどん過激になっていつていつていっている。

「僕が学校にいる人と仲良くしているのは、自分の評判を下げないため。ただそれだけだよ。評判が悪くなって、母さん達に迷惑がかかったら困るからね」

朝比奈なつきは良い子だ、それは間違いない。

母親の言うこともよく聞くし、成績も優秀。まさに優等生の朝比奈まふゆの弟と呼ぶにふさわしいほど良い子だ。

しかし――

「僕は……医者にならないといけない。友達なんてじゃれ合いに参加する気はないよ」

その良い子は、どこか狂気的になってしまっていた。

□ □ □

「もっと、もっと頑張らないと……」

スイーツ店の厨房で、なつきは小さく呟いた。

母さんは最近甘い。自分の時間などと、そんな時間があつたら医者になるための時間に割く。

——小説家になりたいと間違つた道に行こうとしたとき、医者を薦めてくれたのは母さんだろうに。

「つて、母親が甘いつて反抗期か僕は……」

なつきはそんな苦笑を浮かべながらスイーツを完成させる。

自分が反抗期か？ そんなことはどうでもいい。今は医者になることだけを考えなければ。

学力の向上、資金の調達、専門の勉強、やるべきことは山ほどある。

とりあえず今は、金を稼ぐことだけを考えないと。

そんな事を考えていると、なつきは店長である女性に肩を叩かれた。

「なつきくん？ お客様よ」

「お客？」

なつきは首を傾げた。

学校の知り合いにはこのスイーツ店の話をしたことはないし、両親達も場所までは知らないはず……。

——誰？

□ □ □

「……あー、なるほど貴女たちでしたか」

その疑問は、テーブル席に座っている少女達四人を見てすぐに解消された。

「なんだい弟君。作ってくれるって言ったじゃないか」

「まさかここに出向いてくるとは思いませんでした。行動力の化身過ぎませんか？」

いたずらっ子のような微笑みを見せる瑞希に、なつきは小さくため息をついた。

「ごめんなさいね、いきなりお邪魔しちゃって」

「あ、いえいえ。絵名さんは常連ですので別に良いのですが……」

なつきは、そのまま姉であるまふゆのほうに視線を向けた。

「……姉様も来たんだね」

「姉が来たらだめだったの？」

「いや、普通に嫌だけど」

「なんで」

「何でって……」

「なんで来ちゃいけないの？」

「………恥ずかしいからだよ」

「なんで恥ずかしいの？」

ちつとも理解してくれないまふゆに、なつきは頭を抱えた。

最近感情が乏しいのは理解していたが、まさかここまでひどくなっているとは……。

「あんたねえ、ちよつとは弟の気持ちに寄り添ってあげたらどうなの？」

「……よくわからない」

「それを言うなら、ここの場所を教えてくださいましたのは絵名でしょ？　絵名にも原因があるんじゃない？」

「わ、私に責任転嫁しないでよ！」

そんな話を聞きながら、息絶え絶えになっている奏におしぼりと紅茶を差し出した。

「奏さん、大丈夫ですか？」

「う、うん。だいじょう……ぶ」

「奏さんは外がだめですからね、ゆっくり休んでください。紅茶はサービスです」  
なつきは奏に向かってウインクをしたあと、三人に向けて口を開いた。

「皆さん。そろそろ注文を——」

「えー、注文したら弟君厨房行っちゃうでしょ？ もうちよつと話してようよお」  
「早く決めないと出禁にしますよ？」

□ □ □

「なつきくん、そんな顔も出来るのね」

四つのスイーツを運ぼうとしていると店長にそんな事を言われた。

「はい？ なんの話ですか？」

「さつき、とても楽しそうな目をしてたから」



「楽しそうな目、ですか」

なつきはその店長の言葉に違和感を覚えた。

どういう意味だろう、先ほどは『楽しそうだと見せる』ポーカーフェイスはしていなかった。そんな目をしているはずがない。

ならば自然に——？ 馬鹿な。

「気のせいでは？」

そんなことあるはずがない。

ただ姉の友達と話していた。それは母親が勧めてくれた医者とは全く関係のない無駄でしかない時間。

——そんな無駄な時間で楽しくなんて……。

そんなことを考えていると、店長は決心したように頷いた。

「よし決めた、貴方、あの子達の接客に行きなさい」

「え、でも——」

店長の言葉になつきは目を丸くする。

確かに今はお客がほとんど来ない時間帯ではあるが、だからといって仕事を放棄して姉の友達と話すのは……。

「店長、お言葉ですが……」

「——いきなさい」

「……はい」

どことなく、店長から逆らったら殺すという気迫を感じ取った。

なのでなつきは素直に店長の言葉を聞き入れた。

□ □ □

「お待たせいたしました。ご注文の品です」

「いよっ、待ってました」

なつきはテーブルの上にスイーツを乗せると、ぺこりと頭を下げたあとにまふゆの隣

に陣取った。

「あれ？ 厨房に戻らなくて良いの？」

「……この四人の接客をしろと言われたので」

絵名の問いに答え、なつきは盛大に嘆息した。

そんななつきを見て、奏はなんともいえない苦笑を浮かべた。

「そっか、良かったね。でいいのかな？」

「……ただの公開処刑ですけどね」

「そんな事より食べようっ。せーのっ」

「「いただきます」」

そして、四人はなつきの作ったスイーツを食べ始めた。

「う・ま・い・ぞおおおおおおおおお——ッ！」

「瑞希、うるさい」

「いんやー、ごめんごめん、思った以上においしかったものだからつい」

まふゆの叱咤を受けても、ヘラヘラと笑顔を見せる瑞希。

「おいしい、とつてもおいしいよ」

「これ、前に来たときよりおいしくなってるんじゃないの？」

「お褒めにあずかり光栄です」

絵名と奏からの褒め言葉をもらい、なつきは無表情で頭を下げた。

「それにしても不思議だなあ、弟君も味わかんないはずなのになんでこんなにおいしく作れんのかねえ」

「本に書いてある事を、軽くアレンジしているだけですから。そんなに難しいことではありません」

「へえ、そうなんだ。おいしいねまふゆ」

「よく、わからない（もきゅもきゅ）」

事務的に食べているまふゆに苦笑しながらも、なつきはあることを訊いた。

「そういうば、みなさんは姉様とどういったご関係で？」

そういえば訊いていなかった。

学校もまふゆとは違うみたいなので、学校で知り合った訳でもないのだろう。その問いに、珍しくまふゆは言葉を詰まらせた。

「……………」

「……まふゆ、なつきくんなら言っても良いと思う」

「そう、だね」

奏に後押しをされて数秒後、まふゆはやつとの思いで口を開いた。

「曲、みんなで作ってるんだ」

「曲を作る？」

「うん……」

「曲を、作る」

なつきは目を白黒させた後、ぼそつと呟いた。

「すつゝ」

「え？」

「流石姉様、音楽の才能もあつたんだ。簡単にできることじゃないよ」

少し心配そうな表情から一転、どこか楽しそうに話すなつきに、今度はまふゆが目を白黒させる。

そんな二人を見て、三人は無意識に頬を緩ませた。

「あ、そういうえば姉様。前に音楽作りたいたか言つてたね、まさかもう作つていたとは……。つまり、みなさんはサークルか何かですか」

「ええ、基本的にネットで活動してるサークルよ」

「へえ、活動名を聞かせていただいても？」

「……誰にも言わないって約束できる？」

「はい、出来ます」

「なら、ちよつと、耳貸して」

奏の近くになつきが立ち、耳を貸す。

そして数秒後――、

「○△□○△□○△□○△□○△□——ツ!!」

まふゆが弟から聞いたことがない金切り声のような音を聞いた。

その大きな声に、まふゆは珍しくビクツと身体を震わせる。

「ま、まじですか」

「マジマジ〜」

「大マジよ」

盛大すぎる反応がうれしかったのか、絵名と瑞希は微笑みを浮かべる。

一方その頃、奏は耳を押さえていた。

「……いたい」

「み、皆様がああ、『二十五時、ナイトコードで。』の……」

「……知ってるの？」

「知ってるもなにも、大ファンだよ姉様」

『二十五時、ナイトコードで。』通称【ニーゴ】

今の学生で、その名を知らない者は少数であろう。

作詞、作曲、イラスト、それら全てを外注せずにこなし、ネットで活動している謎のサークル。

曲の中にはすでに二千万再生に届きそうな曲もあり、かなり人気のサークルだ。

人物像、経歴、その他一切不明で謎が多く、それゆえに人気の高いサークルである。

「僕も何度も聞かせてもらってます、まさか学生のグループだったなんて」

「あははっ、そういう反応をされると……。まあ悪い気はしないね」

「な、内緒にしてね」

「は、はいっ！ 内緒にします！」



少し興奮気味のなつきを見ながら、まふゆは小さく呟いた。

「……なにも言わないの？」

「？」

「私、こんなことやってるんだよ」

「あー」

確かに、この話を母親が知ると少し面倒になる。

『それは本当に必要なこと?』とか『物事を広く見てほしい』だのそんな事を言ってくるだろう。

けど、なつきは母親ほど優しい気持ちは持っていない。

「確かに、母さんだったら色々言うだろうね。けど僕は何にも言わないよ」

「……え？」

「そりゃあ、色々と思うところはあるけど……」

多少気に障るのは事実だ。

ネットで知り合ったであろう人たちと会うのは出来ればやめてほしいし、医者になりたいという話はどこ行ったと思わなくもない。

しかし、それだけだ。

「それは僕の感情であって、姉様が求められている物は違う」

「……………」

「だって、もうこの人達と知り合って、音楽を作り続けてきたんでしょ？ だったら作らないと」

「作って……………良いのかな」

「いきなり作るのを辞めたら、無責任ってもんでしょ」

なつきはまふゆの顔色を伺いながら、話を続けた。

「もう姉様は曲を作ってる、そしてファンもいる。なら作らなきゃ」

「……………」

「ファンのみんなも、この人達も、ずっと待ってるよ？ 姉様が、姉様達が曲を作るのを。」

難しく考える必要ないよ」

そう言つて、なつきは優しく笑つた。

「みとめて、くれるんだ」

「認めるも何も、もう『活動をして世間に広まっている』それが事実だよ。それは僕という個人が認めなくても、大多数は認めていると言う証拠だよ」

——そう、認められているのだ。

たとえなつきがどれだけ御託を並べようとも、その事実だけは動かない。

医者になるより先に個人の能力を認められ、ユニットとして活動をしている。それ以上でもそれ以下でもない。

ならば、それを応援しないなら何が弟だ。

「少なくとも、目の前にいる一人のファンは——そう思つてる」

「……ありがとう」

まふゆは優しく目を細め、

ぎゅ——っ

「ぎゅっ……」

なつきを抱きしめた。

「ぎゅーっ、よしよし」

姉の胸に包まれながら、彼女の心臓の鼓動がトクン、トクン、と聞こえてくる。

その音を聞いているだけで心が安らいでしまいとろけそうになるが、それを必死に押さえ、なつきは強引に胸を押し、距離を取った。

「や、やめてってー！」

「なんで？」

「恥ずかしいからだよー！」

「よくわからない」

「わかる努力をして！ 姉の友達の目の前で、しかもバイト先で抱きしめられてるんだよー！」

顔を真っ赤にして怒っているなつきを見て、三人は微笑ましそうに笑った。

しかし姉であるまふゆは意味がわからずに首を傾げていた。

「そんなエキセントリックな事をする姉弟がどこにいるよー！」

「どこにいるでしょ?」

「……………」

「……………」

「……………」

(くっそう何も言い返せない)

□ □ □

その日の夜、なつきはニーゴの曲を聴きながら勉強に勤しんでいた。

「これがあの人達が作った……。才能って怖い」

ふと思い返してみると、あの人達は外注もせず、しかも学生という若さであのクオリティの音楽を作り出しているのだ。

正に天才と呼ぶにふさわしいだろう。

「姉様は……。きちんと結果を出してるんだね」

小さく、本当に小さく。なつきはそんな事を呟いた。

いつだってそうだ、何でもかんでもそつなくこなし、いつだって自分の先を歩んでいく。

そして……。それがとても辛かった。

自分もこんなに努力しているはずなのに……。と。

「……………」

不意になつきは、つけていた極薄の手袋を外した。

すると、手首に痛々しいナイフで刻まれたような傷跡が露出する。

——そして、なつきはそのままカッターナイフを取り出し、カチカチツと刃を出した後、

——そのまま……、

三

?

【~~~~♪】

「↓」

カッターナイフがなつきの手首を切り裂こうとしたその時、先ほどまで流れていた  
ニーゴの曲が止まり、  
突然知らない曲になった。

「……何？ この曲」

聴いたことがない曲だ。

優しくもあり、何処か儂げで、とても静かな曲。

——こんな曲、プレイリストに入れたっけ。



なつきは好奇心からか、カッターナイフを机に置いた後、外した手袋を付け直し……謎の曲が鳴っているスマホに手を伸ばす。

「……『Untitled』？」

その曲名は、見たことも聞いたこともない曲名。

しかもそれを歌っているのは、実の姉——まふゆのように聞こえた。

と、次の瞬間——、

「わっ、な、なに!？」

突然、目の前が目映い白い光に包まれ、なつきの視界は真っ白になった。

□ □ □

「………ん?」

なつきが気がつく、そこは灰色の何も無い空間だった。

「ハイハイ……はっ。」

地平線がずっと奥まで続いており、ある物とすれば鉄骨やコンクリートブロック、それらが散乱している謎の場所だった。

「……………どっ！」

なつきはあたりを見渡し、事の状況を整理する。

——何が起った？ 先ほどまで自分は勉強を……………。

【暇つぶし】をしようとした矢先に曲が流れて。その曲名を見た瞬間視界が真っ白になって……………。

「なるほど……………そういう事か」

なつきは状況を完全に理解した後、

「これが〇億年ボタンという物か——」

訳のわからない解釈をしていた。

「ネットのデマだと思つてたら本当にあるとは……、しかも音楽の再生ボタンがトリガーつて、自動再生にしてる人回避不可能やん」

そんな事を考えながら、なつきは散策をし始める。

本当に何も無い空間だ。まるで海の水平線をずっと歩いているような、そんな感覚に陥る。

——ここで〇億年……か。

「……………」

なつきは、その場にぺたりと座り込んだ。

トクン、トクンッと自分の心臓が恐怖で早まるのを感じる。

運動以外で心臓の鼓動が早くなるのはいつ以来だろうか。

——多分、あの遊園地の時以来かな？ あの時は怖かったな。

.....

「……って、明らかにそんなレベルじゃねえ！」

なつきは妙に達観している自分に自分でツツコみを入れた。

こんなところで〇億年過ごすなんて冗談じゃない！ なんとかして帰る方法を見つ  
けなければ……。

と、やっと事の重大さに気づいた、その時、

「ねえ」

「え？ うわっ！」

突然、後ろから女性の声が聞こえた。

「だいじょう、ぶ？」

その女性の見た目は高校生くらいだろうか。

背景に溶けてしまいそうな銀髪に、緑とピンクのオッドアイ。

銀色のブラウスにフリルの付いたスカートを着ている何処か浮世離れた少女だ。

「い、一応大丈夫、かなあ？」

「……そっか」

あやふやな返事をするなつきだが、特に気にせずは無表情を貫く銀髪の少女。  
その顔は何処か機械的で、まるで張り付いたような表情に見える。

「貴方……だれ？」

「それはこっちの台詞なんだけど……。僕はなつき、君は？」

「……………ミク」

小声で、しかも無表情で聞き取れるかどうかの声で名乗る銀髪の少女——ミク。

(ミク? それって…………)

その名前に、なつきは聞き覚えがあつた。

確かバーチャルシンガーの名前だったはずだ。

しかし、こんなバーチャルシンガーはいなかったと記憶している。

「ねえ君、ここがどこだか、わかる?」

「……………ここは、『誰もいないセカイ』」

「誰もいないセカイ?」

「貴方と呼んだのは……………わたし」

「君が?」

「うん……………」

ミクの言葉に、なつきは目を見開いた。

「なんで、呼んだの？」

「それは……………」

「……………」

「……………」

「……………」

長い沈黙、本当に長い沈黙の後、ミクは言葉を紡いだ。

「呼ばなきゃ……………いけない気がしたから」

「なにそれ……………」

「呼ばなかったら、貴方が、消える気がした」

「……………そっか」

「うん、そう」

話は全く続かない。

しかし、何処か芯を抉るような彼女の言葉に、なつきは珍しく不快感を覚えた。

「じゃあちよつと聞きたいんだけど、僕が消えなかった……存在してたとして君に利点はあるの？」

「……………」

「僕は所詮凡人のフリをしたポンコツでね。僕が生きていても死んでいても君には利点も欠点もないと思うんだ」

「……………」

全く言葉を返してはくれないが、なつきは言葉が続ける。

「教えてほしいんだ、君がどう感じ、何故その行動をしたのか。哀れに感じた？ 無様に感じた？ 惨めに感じた？ 一体、どう感じた？」

どこが怒気のような物をはらんでいるなつきの問い。

「なあ、答えてよ。君には僕が、どう見えたんだ」



「……………」

しかし、何を問いかけても、何を聞いても全くの無口。  
そこでふと我に返り、なつきは頭を下げる。

「…………ごめん、別に君を責めたい訳じゃないんだ。許してほしい」

そう言うと、なつきはポケットからある物を取り出した。  
それは、いろんな色が入ったグミだった。

「…………なに、これ」

「え？ グミだよ。知らないの？」

「…………知らない」

「まあ、食べてみて」

なつきは袋を開け、袋の口をミクの方へと差し出した。

ミクは恐る恐ると言った様子で手に取り、モキュモキュ……と音を立てながら食べ始めた。

「……おいしく」

「でしょ?」

ミクの少し驚いた顔を見て、なつきはくすりと笑った。

「……もつと」

「あ、はいはい」

(なんか、僕より年上のはずなのに子供っぽい)

上目遣いで要求してくるミクに、そんな失礼な事を考えていた。  
その時、

「……なつきっ?」

後ろから聞き慣れた声が聞こえ、その声の主がいる方を見ると。

「まふゆ姉！」

実の姉、まふゆの姿があつた。

なつきは無意識にかけだし、まふゆに抱きついた。

「きゅっ……」

まふゆはよろけそうになるが、その場になんとか踏みとどまる。

「珍しく、甘えてきたね」

「あ、あれ……：僕」

無意識。

完全に無意識だった。なぜかまふゆを見た途端身体力がすつと抜け、まふゆに倒れ

るように抱きついていた。

無理もない、突然誰もいないところに放り出されて、機械のように無表情な女と二人つきりだったのだ。不安にもなる。

「ご、ごめん姉様」

「ううん、いいよ」

いつものように抱き寄せ、頭を撫でてくれるまふゆ。

いつもは恥ずかしいのに、いつもより安心するような、心臓の鼓動がゆっくりと正常な早さになるのを感じた。

「よし、よし」

「……………ふえ」

——もうちよつとだけ、このまま。

そう思った矢先、何処かから視線を感じた。

だが、その視線は決してミクの物ではない。

「うっわああ……、姉弟なのにだいたん。キスカ？　もしかしてキスするのか？」  
「ちよちよつと、瑞希、そんなに大声出さないでよ！　気づかれるでしょ！」  
「……（じー）」

その視線を感じ、なつきは真つ赤しながらまふゆを突き飛ばした。

□ □ □

「ねえねえ、弟くん？　さつき自分から抱きついて——」

「抱きついてません」

「さつき姉様じゃなくて『まふゆ姉』って聞こえたような？」

「言ってます」

「さつき顔真つ赤にしてたよね？　弟くん？」

「してません」

「ここにお姉ちゃんがいなくて寂しかったのよねえ？」

「寂しくありません」

現在、なつきは瑞希と絵名の二人にこれでもかと言うほどいじられていた。

おそらく、二人としてはいつも無表情で愛想がないまふゆと比べ、彼の達観しながらも年相応の振る舞いが気に入ったのであろう。

「え、ええつと。こんな所に来たら誰だつて不安になると思うよ？」

「……優しいですね。奏さん」

そう言つて、なつきは奏の後ろに隠れた。

「なんかさあ、まふゆがブラコンになった理由がわかつた気がする」

「ほんとそれ、うちの弟もこの子くらいかわいげがあつたらなあ」

そんな会話を楽しんでいる絵名と瑞希をよそに、なつきは奏の後ろから睨むように見つめていた。

「と、とにかく！　今スマホに流れている音楽を止めれば出られるんですね！」

なつきはポケットからスマホを取り出し、絵名と瑞希に見せつける。

「それはそうだけど、良いのかな。ここにいたら二人つきりで甘えられるかもしれないのに」

「瑞希？ その子は多分『見られながら』で甘えるのが好きなのよ」

「ほおお、なるほどなるほど、ませてるねえ」

「ませてるわねえ」

「~~~~ツツツ!! キライツツツ!!!」

顔を真っ赤にし、まるで子供のような罵声を二人に浴びせ、なつきはこのセカイから去った。

「……珍しい、逆ギレした」

「逆ギレって、本人の前では言わないであげてね……?」

無表情でぼそっと呟くまふゆに、奏は苦笑を浮かべた。

「あー、いじつたいじつた！」

「休憩できたし、そろそろ作業に戻りましょうか」

と、二人が現実世界に戻ろうとしたその時、

「——ちよつと待って」

珍しく、まふゆが止めに入った。

「なに？ 弟をいじめんなとかそういう話？ ボク達はべつに——」

「違う、そういうのじゃない。絵名に、聞いてほしい悩みがある」

「……わたしに？」

□ □ □

「……ん」



次に気がつくとき、そこは見慣れた自分と姉の部屋だった。  
まふゆは机の上で音楽を聴いたまま、動かない。

「夢……なわけないか」

ポケットにあつたはずのグミがなくなっているのを確認し、小さくため息をついた。  
そして、ぽつんと置かれたカッターナイフを見つめる。

——呼ばなかったら、貴方が、消える気がした。

「……全くもう、興が削がれたよ」

なつきは苦笑いを浮かべ、カッターナイフを元の場所に戻した。  
と、次の瞬間、

こんこん——ッ。

突然、この部屋をノックする音が聞こえてきた。  
おそらく母親だろう。

なつきは目の前に広がっていた勉強用具をいったん閉じ、扉へ向かった。

「なに？」

「ごめんね、勉強してた？」

「うん、でもキリついたところだからいいよ」

「それなら良かったわ。そういえば、今日模試だったのよね？ どうだった？」

——なるほど、それを聞きに来た訳か。親はそういうのを知りたがる物だ。  
なつきは机の横にかけてあるリュックから模試を取り出し、母に渡した。

「はい」

「まあ、全部満点！ 頑張ったわね」

そう言って、母は微笑みを浮かべる。

しかし、なつきは何処か不満げであった。

「別に、想定されるであろう問題で、想定されるであろう答えを出しただけだよ」

「それでも、これだけ出来ることはすごい事よ？ 流石自慢の息子ね」

「こんな物に正解しても意味がない。文字通り模擬の試験。ただの練習、紙の上の遊び」

不満げに母親から用紙を取り上げ、ぐしゃぐしゃに丸めてゴミ箱に放り投げた。

「こんなもの、実践では何の役にも立ちほししない。重要なのは本番でそれをどこまで『最適に、そして最短に出来るか』それだけだよ」

「……………」

なつきにとつては、所詮家族とは関係ない他人を扱う仕事だ。

他人の命がどうなろうと知ったことではないが、悪評が付いたら母親や父親、姉にも危害が及ぶ。

だからこそ完璧に、そして最適な方法で仕事を全うし、『仕事出来る人』でいる必要がある。

——『良い子』でいるために。

「それじゃあ、勉強に戻るから」

なつきが母親との話を終わらせ、扉を閉めようとした。

——その時、

ぎゅ——ッ

「きゅっ」

突然、なつきは母親に抱きしめられた。

「ずっと、良い子でいてくれてありがとうね」

「……かあ、さん？」

「けど、怖い。なつきがどんどん壊れていつているようで……。お願いだから、無理はしないで……」

そう言いながら、母親は涙を流していた。

なぜ涙を流しているのかは、わからない。

しかし、なつきは恥ずかしそうにしながらも、抱きしめ返した。

「……ありがとう、母さん」

□ □ □

突然だが……——も・う・一・度！ 本来の姉弟関係の常識を確認しておこう。

普通だったら姉弟の部屋というのは別々だ。子供の頃は一緒かもしれないが、歳を重ねるごとに一人部屋がほしいと感じるようになる。

そして、仮にも同じ部屋だったとしても、ベッドは流石に別々だ。

もしベッドが一つしかないとしたならば、姉がベッドを使い、弟はソファやどこかで寝かせるのが姉弟という物だろう。

「ぎゅーっ」

しかし、「で？」と言わんばかりの表情で、まふゆはなつきと同じベッドで寝転び、抱きしめていた。

「……姉様、苦しい」

「……………」

「離して……」

「……………」

「まさかの無視」

なつきは盛大にため息をつきながら、ゆっくりと目を閉じた。  
そんな姿を、まふゆはじっと見つめていた。

□ □ □

「それで、話って何よ」

「絵名は、弟が勉強してるときにカッターナイフみたいな音聞いたことある？」  
「はっ。」

意味のわからないまふゆの言葉に、絵名は首を傾げた。

「……どういう、意味？」

「なつきが勉強している時、そんなカチカチつて音が聞こえるの。でも特に机には切った形跡が無くて……。よくわからなくて」

その話を聞いた瞬間、嫌な予感が三人の頭をよぎった。

「それ、ホント？」

「うん」

「カッターみたいな音は聞こえるけど、その跡はない」

「うん」

再度確認する奏だが、その答えはYES一つ。

——ありえなくもない、あの母親なら、姉であるまふゆがこうなってしまうほどひどい家庭環境なら……。可能性は十分にある。

「これは……結構やばいかもねえ」



## 四

？ 夕方の噴水付近。

浴衣や子供たちの声、そしてなんとも言えない屋台の香りが鼻をくすぐるその場で、ニーゴとなつきは集まっていた。

「さあ！ みんなで花火大会の屋台であそぶぞお！」

「おおーっ」

大きな声でそう宣言する瑞希に連鎖するように、なつきはなにかを崇めるように両手をあげた。

「ちよつと、もうちよつと大人しく出来ないの？」

呆れ混じりに言う絵名に向けて、瑞希はピシッと指差した。

「なにいつてんの！ 夏祭りには世界が認める一大イベントだよ？ 高校生なら騒がな  
きや損でしょ？」

「そーだそーだ」

「いや、知らないし。ていうかなつき君キャラ違わない？」

「なつきは色んなポーカーフェイスを持つてるから、あれは『ふざけるときのポーカ  
ーフェイス』」

なつきのキャラの違いに少し困惑している絵名に、まふゆは注釈をいれた。

「めんどくさいわね?! アンタら姉弟そろって!？」

「えへへっ」

「ほめてないわよ!」

なぜか照れるなつきに、絵名はツッコミをいれた。

「ともかくっ！ さっ、いこいこっ!」

「おまつりだー」

妙に急かす瑞希となつきを見ながら、奏は小さくため息をついた。

□ □ □

時は、まふゆが絵名に相談をした時まで遡る。

「——つまり、あの子はそのリストカットっていう行為をしている可能性がある」  
「まだ、確定じゃないけどね、でも……」

奏が言い終わるより先に、まふゆはスマホを取り出して現実に戻ろうとする。  
しかし、曲を流す寸前で絵名に止められた。

「待ちなさい。どうする気？」

「直接話して確かめる」

「簡単に伝えれないからこんなことになってんでしょうが！ 無理に詰め寄っても話してくれないだけよ！」

「わたし相手なら、なつきは話してくれる」

どこか焦りが滲んでいるまふゆの肩に、瑞希は手を乗せた。

「まあまあ、まふゆのその優しさは立派だけど、それは今の弟くんには重荷になるんじゃないかな？」

「……………」

「……………ひとまず、様子を見ようよ、勘違いならそれでいい。もし勘違いじゃなかったら……………」

言っている途中で、奏は暗い顔をした。

「あははっ、出来ればそういうことにはならないでほしいね。勘違いじゃなかったら――、最悪一生会えなくなるのも覚悟しなきゃいけない」



「ねえ、これやってかない？」

絵名が指を指したのは、夏祭りならどこにでもある射的だった。それを見て、瑞希はニヤニヤと笑みを浮かべる。

「絵名もこりないねえ、前にあんなに……」

「うるさいわね、あの時はあの時よ。やるの？ やらないの？」  
「やります」

と、ポーカーフェイスをやめて元に戻ったなつきが、お金を支払い、銃を手にする。  
——そして、発砲した。

ぼんっ。  
すかっ。

しかし、弾は驚くほど明後日の方向に飛んでいった。

「……」

「もう一回」

ぼんっ。

すかつ。

「もう一回」

ぼんっ。

すかつ。

「もう一か——」

「はいストップストップ！」

全くめげないなつきに流石に我慢の限界を迎え、絵名が止めに入った。

「全部あらぬ方向に行ってるじゃない！ 今のところただの貯金箱よ？」

「でも、難しくて……」

「ああっもうっ！ 貸しなさい！」

そう言って、なつきの持っていた引き金を奪い取り、景品を狙い撃つ。

ぼんっ。

すかつ。

しかし、当たらない。

「あ、あれ？ 今度こそ……」

ぽんっ。

すかつ。

「なんでよ！」

ぽんっ。

すかつ。

「次、僕やる」

そんな二人の不毛すぎる争いに、瑞希はたまらず苦笑を浮かべた。

「あ、あつはは。まだかかりそうだし、ボク達は他を回つていようか」

「……いいの？ なつきくんをほっといても」

ぼそぼそと、奏がそんな事を聞いてきた。

「二人つきりの方が、話せることもあるよ」

これは、瑞希なりの配慮であった。

こんな大人数で、しかも姉のいる前では話せる悩みも話せない。ならば一旦ここは実の弟がいる絵名に任せるのが得策であろう。

——その子を任せた。

と絵名に目配せをした後、瑞希は歩き始めた。

「ほら、まふゆもいくよっ」

「……うん」

□ □ □

「しよぼーん」

「ねえ、なつき君さ」

「？」

全弾明後日の方向に飛んでいき、完全に意気消沈しているなつきに、最初は絵名が探



りを入れた。

「最近、困ってることない？」

「困ってること……ですか」

「ええ」

「うーん……」

なつきは少し考えを巡らせた後、口を開いた。

「絵名さんって、才能って存在、信じます」

「……………」

才能、彼女が一番嫌いな言葉だ。

何度も『向いていない』『才能が無い』と烙印を突きつけられたのだから――。

だが、認めたくはないが、まふゆのような才能の塊がいるのは事実。

「まあ、あるんじゃない？」

「でしたら、『才能』という言葉。どうやったら断言出来ますか？」

「どうやったら……か」

絵名は少し考え込んだ。

確かにいろんな人から才能だなんだと言われてきたが、その言葉の本質を深く考えたことはなかったかもしれない。

「たまにいないじゃない、生まれて持った天性みたいな物を持つてる奴。そういう特出した物を持つてる奴が——」

「……すいません、そういうのじゃないです」

話の途中で、なつきはバツサリと切った。

「そんなものはただの個性でしかありません、それを努力出来るかは全くの別問題です」

「じゃあ、どうなのよ」

「たとえ話をします。ある天才と呼ばれる画家がいました」

「ええ」

「その人の作品は、百点もの作品が美術館に展示され。高評価を得ました」

「ええ」

「しかし、その人の描いた作品は百億点にも登り、それらは日の目を見ることすらありませんでした」

「……………」

「さあ、その天才は本当に天才ですか？ その人の努力の結果を無視して、才能というのでしょうか」

そのなつきの言葉を聞き、絵名はかなり考え込んだ。

彼が話しているのは、美術作品の縮図だ。

優れた芸術家は死んでから名を馳せるように、作品も時間が経過してから評価された作品など山ほどある。

そして、その評価されるのは……その人物が描いていた中でもほんの数点……いや一点だ。

「僕は、才能なんて『無駄な言葉』が嫌いなんです。『才能が無いから』と見下し、『才能だから』と努力を吐き捨てる」

「……………」

彼は痛いほど知っている、才能という猛毒を。

姉のまふゆは才能があるからと努力していないことにされ、なつきは才能が無いからとやろうとすることを足蹴にされてきた。

——才能という言葉は、猛毒でしかない。

「才能という言葉を消したい、それが悩みです」

「……ふふっ」

「……可笑しいと思つたでしょ？」

予想通りだよ、とふて腐れた様子になつき。

そんななつきを見て微笑み、絵名は彼の頭を撫でた。

「？」

「いいえ、全然可笑しくないわ」

彼の言っていることは、正直絵名の心はかなり刺さった。

「才能という言葉が消したい、わたしも同じよ」

なぜなら、彼女は今まで『才能』という言葉に踊らされながらも、必死に努力してきた人間だからだ。

しかし、なつきの言葉はとても芯が通っていて『才能なんて無い』と初めて自覚させられた。

「才能って呼ばれるのは、結局努力次第なのよね。それも何千枚何万枚と」  
「？」

ふっ、と絵名の心が少し軽くなるような気がした。

今まで『才能』と言う言葉に惑わされていたが、彼の話を聞いた瞬間。もう才能という言葉に縛られることが無くなる気がした。

「いいわね、その悩み。わたしも悩み解決に協力してあげる」

絵名はなつきの優しい瞳を見ながら——くすりと晴れ晴れしく微笑んだ。

□ □ □

「あきた」

絵名は未だに射的をしているが、なつきには飽きが来てしまいお祭りをぶらぶらと回っていた。

「あ、弟くん。こっちこっち」

「?」

弟という言葉に反応し、声の主を見ると、案の定というべきか。そこには瑞希が焼きそばを持って座っていた。

なつきはとりあえず彼女の近くに座ることにした。

「姉様と奏さんは?」

「奏は体力消費で脱落、向こうで休んでるよ。まふゆは気がついてたらいなかった。ふう、ふう」

「そうですか」

「ふふっ、僕と二人つきりだね」

「っ」

あざとく笑みを浮かべる瑞希に、なつきは不覚にもドキッと心臓が跳ねた。

「あ、今ドキツとした？ ドキツとしたでしょ？」

「してないです」

「そんなこと言つて、顔がとっても赤いよ？ ふふっ、初心だね」

「……やっぱ貴方嫌いです」

顔を真っ赤にして顔を背けるなつきを面白がり、瑞希はケラケラと笑った。

（……さて、そろそろ始めようかな）

「そんな可愛い僕がさ、本当は男の子だって言ったら、君は信じる？」

瑞希が最初に取った行動、それは『自分の秘密をばらし、相手の秘密を気楽に話してもらおう』事だ。

彼の性格は、おそらくまふゆと似て自分からは自身の悩みなどは話さないであろう。しかし、こちらから話せば、おそらく突破口が見つかる可能性がある。

男に見られてしまうというデメリットはあるが、友達の弟が死ぬ可能性があるのと天秤をかければ、迷わずにそちらを捨てる。

そして――、

「信じます」

「……え？」

全く迷うことなく、信じるという発言に、瑞希は目を丸くした。

正直、女の姿をしているので驚かれると思っていたからだ。

「冗談だっと思ってる？」

「いえ、そんなことはありませんよ」



「だったら……」

「だったら、何です？」

「もうちよつと驚いてくれてもいいんじゃない？」

恐る恐ると言つた様子で聞く瑞希に、なつきは首を傾げた。

「何も驚く事は無くないですか？」

きよとんとした表情でいうなつき。

マジの顔だ、特に驚く事も無く困惑することもなく、さも当然かのような目をしてい  
る。

「……どうして、そう思うのかな？」

そんな彼に、瑞希は個人的な興味がわいた。

この姿、『男』という話に戸惑いもせず、困惑を顔に出すことなく、まっすぐ見つめて  
くる彼を。

——今まで何人も人と話してきたが、初めての体験だった。

「どうして……?」

「あ、そこは考えるんだね」

「少々言葉に困りまして……、ジェンダー的な観点から話した方が良いですか?」

「そんなに難しく考えなくても、君の思ったとおりの答えが聞きたいな」

「そう、ですね」

なつきは数秒間思考した後、瑞希の持っている焼きそばを指さした。

「焼きそばって、食べますよね?」

「え? あーうん。そうだね」

「その時にこの麺の作り方はくく、とか別に気にしませんよね?」

「まあね」

「そんな感じですか」

「?????」

訳のわからないなつきの言葉に、瑞希は目を丸くした。

「どういうことだつてばよ」

「つまりえつと、自分にとつては姉の友達と話しているだけなんですから。別に出身校とか気にならないと言いますか……」

「……………」

一応理解した。

つまり、ただ話しているだけなのだから、『性別は出身校のようにどうでもいい』と言いたいわけだ。

それを焼きそばに例えた訳か……。

こんな、変な理論の……自分を男としてではなく『瑞希』として接してくれる人は初めてだ。

「ぶっあつっははははははっ！」

瑞希はつい笑ってしまった。

悩みを聞くはずが……まさかこんなさりと自分という存在を『瑞希』として見てく

る人がいるとは思わなかったからだ。

「いいねいいねっ！ きみさいっこう！」

「……そうですか」

「そうだね、僕は君のお姉さんの友達だ。性別なんてどうでも良いか！ あっはははははっ！」

「……あの、冷めますよ？」

□ □ □

「はあ……はあ……」

「大丈夫ですか？ 奏さん」

「あ……なつき君」

祭りの屋台が並ぶ外れにあるベンチ。

そこで休んでいる奏の近くに歩み寄り、買ってきた飲み物を差し出した。

「はい、飲み物です」

「あ、ありがとう」

差し出された飲み物をもらい、奏はその飲み物で口を湿らせた。

「おいしい……」

「そうですか、良かったです」

「……………」

「……………」

「……………」

(な、なにか話さないと)

なにも話さない静寂の中、奏は話題作りに躍起になっていた。

なつきの話を聞くべきなのはわかっている、けどとつかかりがない。

元々奏は話すのがあまり得意ではない、どう話題を振ったら良いかわからない。

(いきなり悩み事を聞くのは馴れ馴れしい気はするし、かといって天気とか無難すぎる話をするのも……)

「……………」

「焦る必要はありません」

「？」

突然、はつしたそのなつきの言葉に、考え込んでいた奏は首を傾げた。

「話さなければと思うほど、相手といることに窮屈さを感じてしまいます、難しく考える必要なんてありません。少なくとも僕は奏さんとの静かな時間は……嫌いじゃないです」

「そっか……」

その優しいなつきの言葉に、奏はふっと笑った。

彼はいつも優しい、親身に話を聞いてくれるし、まるで自分のことのように寄り添ってくれる。

それは、おそらく……ポーカーフェイスなどではない。彼の生まれ持つての性格なのだろう。

「……なつきくん」

「？」

「絶対、君も救うからね」

## 五

? 「すう……すう……」

「どうだった、弟と話してみて」

祭りの外れにあるベンチ。

なつきが疲れて眠ってしまったため、まふゆは彼に膝枕をしながら、三人に問いかけた。

「どう、つていわれると困るけど。とっても良い子だなとは思ったわ」

「僕も同意見かな、後考え方が独特で面白いなあって感じたよ」

「あ、それ私も感じた。でも何処か共感できる考え方だったわ」

絵名と瑞希の言葉を聞いて、まふゆはふつと息を吐いた。

「そう、あの子は良い子」



「……良い子って姉であるあんたが言うのね」

彼はまるで蛇のように相手の心の内に入り込み、相手を優しく包む。

その行動はまふゆと違って『偽り』ではなく彼の人柄。決してまふゆにはまねできるものじゃない。

良い子だから誰にでも優しく接するし、良い子だから誰にでも真面目に向き合う。

——まるで狂気的なほどの良い子だ。

「けど、良い子だからこそだめなんだよね？」

「……………」

瑞希の先取りするような言葉に、まふゆは頷いた。

「あの子は、自分の弱音は決して他人には吐かない、良い子だから」

「そうなんだよねえ。明らかに自分からは言ってくれないだろうねえ」

難しいなあ、と瑞希はうなり声を上げた。

良い子というのは、自分の弱いところは決して他人には見せない。

なぜなら、それを弱いところを見せると言うことは、見せたものに気を遣わせてしまうという事。

——強引に聞き出しても、かえって『気を遣わせてしまっている』とストレスを与える事となる。

「奏はどう？ 何かなつきくんと話していて気になった事ってあった？」

絵名は、先ほどから何も話していない奏に話題を振った。

「……あのね、私が不意に『絶対、君も救うからね』って言ったときに「いった、時に？」

『まだ、僕は救ってほしいように見えてるんだね』

「つて、いつてた」

「……………どういう意味？」

「……………わからない」

その言葉の真意はわからない。

しかし、奏にはその意味深な言葉が引つかかかってならなかった。

——まるで、まふゆとは違い、『救ってほしい』なんて思っていないかのような言い方だった。

□ □ □

(やっぱり、直接聞くしかない)

勉強をしているなつきの後ろ姿を見ながら、まふゆはそう決心し、なつきに話しかけた。

「ねえ、なつき」

「……なに？ 姉様」

「最近隠している事、ない」

「隠している事？」

なつきはその言葉に疑問を感じながらも、思考を巡らせる。

「……ない、と思うけど」

「本当に？」

「別に最近変わったこともなかったし、何かあったかな……」

考え込んでいるなつき。

眉の動き方、口元、瞬きの数、全体的な仕草。どれもいつも通りで、嘘をついているようには見えない。

「じゃあ、私に話してないことは？」

「急に何？ 姉様」

「別に」

「そっか」

なつきは少しうなった後。あつ、と思ひ出したかのように目を見開いた。

「そういえばあつた、言つてないこと」

「……それは何？」

「たいしたことじゃないよ、ちよつと精神的に病んでるつて医者に言われちゃつてさ」

そう言つて、薄い手袋で包まれた手袋パンツと引つ張つた後、赤いカッターナイフを見せた。

「『リストカット』？ つて言うんだつて。精神的にやばいらしいよ」

「……大丈夫？」

「大丈夫、姉様ほどじゃない。傷口はケアしてるしね」

へらへらという彼に、ほんの少しだけ……まふゆはほつとした。

リストカットの話聞いたときは驚いたが、どうやら傷口のケアは行っているらしい。

——やっぱり、この子は聞けば話してくれる。

「辛いことがあつたら、いつでも言ってみてね」

「……姉様がそれを言うか」

なつきは苦笑を浮かべた後、ぼそつと呟いた。

「思い出した事だし、母さん達にもご飯の時に話そつと」

□ □ □

「昨日二人はお祭りに行ってきたのよね？ どうだった？」

家族そろって食事をしているとき、母親がそんな事を訪ねてきた。

「楽しかったよ、良い気分転換になったと思う」

「……まあ、問題にならない程度には息抜き出来たかな」

相変わらず、優等生で答えるまふゆと、何処か引つかかる言い方をするなつき。

「そうか、良かったな。父さんも行きたかったよ」

「それで？　どんな子達と行ってきたの？」

母親のいつものような問いに、なつきが答えた。

「姉様の友達と行ってきたよ」

「そうなの、良かったわね。ねえ、その子って勉強——」  
「母さん」

言いかける母親を、なつきが止めた。

おそらく勉強が出来るかどうかを聞いたのだろう。

「姉様がどんな交友関係を持ってても別に良いでしょ？ 年頃の娘に交友関係を問い詰めるのはどうかと思うよ？」

「でも、お母さんはね？ 心配なの」

「？ お母さんは姉様が悪い人たちにホイホイ付いてって仲間になるような悪い子だと思つてたの？」

「そ、そんなわけないでしょ！」

「そうでしょ？ だったら詮索しない。母さんが思うほど姉様は子供じゃないよ」

そんな会話を聞き、父親は「はは」と笑った。

「全く、最近なつきには敵わんな」

「僕は事実を並べただけ」

そう言って、なつきは牛乳で口元を湿らせる。

最近のなつきはいつもそうだ。母親が詮索をしようとする、何かとごまかしてくる。



「ところで、父さん、母さん。ほんの少しだけ話があるんだけど」  
「なに？ なつきが自分からなんて珍しいわね」

何処か不思議そうにする母親と父親。

そんな二人をよそに、なつきは一枚の紙を差し出した。

——【診断書】。そう書かれた紙には病名と詳細が書かれており、その内容は重度のうつ病を示す物だった。

そして、そこには『リストカットを頻繁にしている』という記述もしっかり記載されていた。

その診断書に、両親は驚きの表情を見せた。

「これ……ホントなのか？」

「うん、僕にはよくわかんないけど。これがリストカット？ っていうのの症状なんだって」

そう言って、なつきは薄い手袋を両手とも取り外し、手首を見せた。

「ひっ……！」

その瞬間、母親が小さな悲鳴を上げた。

そこには前腕部分にびっしり切り刻まれた形跡があり、見るに堪えない跡があつた。

「あー、大丈夫だよそんなに深くないから。お医者さんが大げさなだけだよ」

怯える両親を余所に、なつきは手袋をした後笑つて見せた。

その表情は全くの曇りのない笑顔。

優しいなつきの笑顔。

家族が見慣れた可愛い笑顔。

——そのはずなのに、今の彼の笑顔はとても狂氣的に見えた。

「なつ、き……」

恐怖からか、あのまふゆでさえも身体を震わせ、地面に膝をつく。

「姉様まで、どうしたの？ 何か変だよ？」

「どう……して……」

「だって、誰も気がつかなかったじゃん」

そのなつきの静かな言葉に、その場にいる全員が何も言えなくなつた。

——そう、彼は言わなかったただけなのだ。

いつも気がついてくれるから、いつも気にかけてくれるから。自分から言う必要は無いと。

「友達と遊んでたときも『友達は選べ』って教えてくれたし、小説家になりたいって思ってたときも『医者』って勧めてくれたじゃん」

なつきは首を傾げながらも話を続けた。

「その時は辛かったよ？　いろんな友達と喋りたいのにつて。小説家になりたいのにつて、とつても辛かったよ？　でも、僕が間違ってるんでしょ？」

「なつ、き」

「自分の友達を学力だけで計られて、とつても悲しかったし嫌だったよ？　何百作品と小説を書いたパソコンを『いらぬ』って捨てられて、とつてもとつても苦しかったよ？　けど、僕が間違ってるんでしょ？」

まるでいつものように話すかのように、怒りも出さず、悲しさも出さず、彼は淡々と話す。

「いつもは気づいてくれるのに、そんなところまで教えてくれるのに。僕が傷ついても『全く気がつかなかった』じゃん」

ねえ、どうしてそんな顔をするの？

僕、母さん達の望むことはゼーんぶしてるよ？

ねえ、良い子でしょ？

良い子って言うてよ。

## 六

? 「……あれ? まふゆは?」

ニーゴのたまり場である誰もいないセカイで、絵名はそんな事を口にした。

今この場には、ミクを含めた合計四人しかおらず、まふゆだけが見当たらなかった。

「まふゆなら、『今日はこれそうにないっ』って言ってた」

まふゆを探している絵名に、奏がまふゆからの伝言を伝えた。

「そう、それって多分……」

「十中八九、なつきくんの事だろうね。直接聞いてみるとかなんとか言ってたし」

瑞希は頭をかいた。



「まあ、これ以上僕達が口出しするのは野暮だよ。あとはまふゆに任せよう」  
「……そう、だね」

「そんなに心配そうな顔しないでよ奏、きつとなんとかなるよ」

作り笑いでヘラヘラと笑う瑞希だが、奏はずっと悲しそうな表情をしていた。

「……出来れば、早く元気になってほしいわね」

誰にいうでもなく、絵名はそう呟いた。

彼は珍しく、才能という言葉にだまされず、絵名をまつすぐ見てくれる少年だった。だから、もっと話してみたい。まだほんの少ししか話していないのだから……。

□ □ □

「——ひどいと思わない？ ちょっと伝えるの忘れたからって父さんも母さんもあんな

『世界が終わる』ような顔しなくても良いだろうに……」

「……………」

まふゆとなつきの布団の中、二人はいつものように一緒に横たわっていた。

「ごめんね……なつき」

「？」

不意に謝罪の言葉を告げられ、なつきは不思議そうに目を丸くした。

「ごめん、なにが？」

「わたしが……もつと早く気づいていれば——」

「……？」

「もつと早く、なつきに寄り添ってあげる事が出来てたら……。本当にごめん」

まふゆは、何度も何度もなつきに謝罪の言葉を口にした。

もつと、もつと迅速に行動をしていれば、彼は『リストカット』なんてふざけた行為しなかったかもしれない。

もつと親身になってあげていれば……。彼は壊れなかったかもしれない。

——これは姉としての責任だ。詫びて、詫びきれぬ物じゃない。

「いや、姉様は僕が忘れてた時、すぐに『言っていないことない？』って気づいてくれたじゃん。姉様の悪い事なんてひとつもないよ？」

「……………」

先ほどから、話がかみ合わない。

おそらく、なつきには自覚がないのだろう。

あの時はただ、普通に家族と話したけど、そういう感覚なのだろう。

『傷に気がつかなかった』それは彼にとっては『当たり前』その当たり前を口に出しただけ、そんな感覚なのであろう。

——まふゆは、姉弟だからこそ彼の考えは手に取るようにわかる。だからこそ胸が張り裂けそうなほど辛い。

——弟に、『当たり前前』と思わせるほど追い詰めてしまったことが。

きゅー——

「きゅ……」

気がつくとき、まふゆはなつきを抱きしめていた。

その瞬間、なつきの顔がむにゅ……つと柔らかく優しい感触に包まれた。

□ □ □

「——はい、失礼します」

「……ん？」

なつきは、次の日まふゆの声によって目が覚めた。

まふゆは手にスマホを持っていて、誰かと話しているようだった。

「姉、様？ 誰と話してたの……？」

「中学校の先生」

「……………」

姉様が中学校の先生に……？ 頭が上手く回らず、なつきは首を傾げた。

「なんの、話してたの……？」

「欠席の話」

「欠席……？ 誰が？」

「なつきが」

「そっかあ……」

なつきは眠たそうにそうほわほわと言った後。

「つて、ええええええええええええええええ——ツ!!」

朝っぱらにもかかわらず絶叫した。

突然の叫び声に、まふゆは無表情のまま耳をふさいだ。

「ど、どうして!？」

「大丈夫、私も休んだから」

「何も良くない!?! っていうか問題が一つ増えた!?!」

予想外の発言二連撃目に、なつきは目を白黒させた。

「僕別に熱とか出していないけど?! もしかしてまふゆ姉が風邪引いた?」

「なつき、口調」

「はっ——。……姉様が風邪引いた?」

なつきは咳払いをした後、まふゆの額に自分の額をくつつける。

しかし、特に熱がある様子はない。

「……? まさか昨日謝ってたのって、今日の強引に休むから?」

「?」

なつきはそんな勘違いをしているようだが、まふゆは『まあそれでいいか』と首を縦に振った。

「そう」

「うっわ、初めて姉様が『横暴な姉』に見えた」

□ □ □

そんなこんなで、なつきとまふゆは通勤ラッシュが終わった妙に人が少ない道を歩きながら、なつきは口を開いた。

「それで？ 姉様。『学校休んで出かける』という青春みたいな事をして、どこに行く気？」

「……みんなが笑顔になれる場所」

「みんなが笑顔になれる場所？」

「すぐにわかる」

そんな話をしながらも、二人は今日の目的地へと到着した。

「遊園地？」

そこは、『フェニックスワンダーランド』と呼ばれる遊園地であった。

いろいろな模様のブロックが置いてあったり、カラフルな機関車が走っていたり、楽しいのある場所だ。

「ここが、みんなが笑顔に慣れる場所？」

「そう、入ろう」

なつきはまふゆに強引に手を引っ張られ、久しぶりに遊園地の中に足を踏み入れた。

「それで？ 姉様。何から乗る？」

「……何も疑問に思わないんだね、急にこんな所に来てるのに」

「もう休んじやったし、気にしても仕方ないからね。それに姉様と一緒に遊べるなら、学



校の授業なんてポイポイしてやるさ」

そう言ってヘラヘラと笑うなつきを見て、まふゆもくすりと笑った。

「そっか」

「それで？ 何から乗るの？」

「……………なつきの乗りたいのから」

「OK、ノープランなのね。だったらゴーカートから乗ろうよっ」

そう言って、なつきはゴーカートの待機列を指さした。

□ □ □

そうして、二人は勉強の事は一旦忘れ、フェニックスワンダーランドを満喫した。

ゴーカートに乗ったり、ジェットコースターに乗ったり、お化け屋敷に入ったり、ただ無意味に走り回ったり。

まふゆは終始無表情を貫いていたが、なつきはとても楽しそうにしていた。

「いやー、久々に来ると楽しいねここ。前は母さんと一緒に来たっけ？」  
「うん、そうだね」

「あの時の母さんはただの毒親ムーヴだったなあ。『お母さんの言うことを聞く良い子だったら』とかなんとか言ってる。全部僕らに責任転嫁かよってね」

そして、二人は最後に観覧車に乗っていた。

「なつき、今日は楽しかった？」

「不思議な事を聞くね、姉様は。僕は姉様と一緒に楽しく無かった事なんて一度も無いよ」

「そういうのじゃなくて、貴方自身が楽しかったかどうか」

まふゆは今まで聞かなかったことを聞いた。

彼は自分といるといつも楽しそうにはしてくれるが、それは全て幻なのかもしれない。  
い。

彼の狂った笑顔を見たとき『本当は姉が嫌いなんじゃないか』と不安になった。

——だって、今まで弟の異変にも気がつかない無能なお姉ちゃんだから。

「姉様、ちよつと勘違いをしてるよ」

「え？」

「こういう場合は、自分が楽しむのも大事だけど。それだけじゃだめなんだ」

窓から外を見ながら、なつきはそんなことを言った。

「勿論、僕個人としても楽しかったよ。でも姉様がいないとそんなに楽しく無かったと思う」

「……………」

「いい？ 姉様。遊園地って言うのは『誰と行くか』だよ」

「そう、なの？」

「うん、だって、家族連れは気恥ずかしいし、男同士は空しい」

突然、なつきは変なことを語り始めた。

「結局遊園地で生存が許されるのは、百合百合してるJKか彼女持ちって言う特権階級

ただだよ」

「何それ」

「よく知らない、友達が言つてた事だから」

「それじゃあ、なつきは私とここに来るのは気恥ずかしいの？」

「いや別に、むしろ姉様が来なかつたら、僕はここに來てないよ」

そんな話をしながら、なつきはくすりと笑つた。

「まあとにかく、僕は十分楽しかつたつて言いたいんだよ。姉様とも久々に遊べたしね」

「……そっか」

いつもの優しい笑顔を見せるなつきをまふゆは優しく頭を撫でた。

今まで姉として彼のSOSに気がつかなかつたのは決して許される事じゃない。

けど、彼はいつだつて楽しそうに、姉であるまふゆを見つめてくる。

——もう、目を離さないから。

彼の優しい笑顔を見ながら、まふゆはそう誓つた。

□ □ □

二人が家に帰ると、両親が深刻そうな顔をしており、「話がある」とお茶の間で家族会議が行われた。

「お母さん話って何？」

いつも通り、いきなり優等生モードになるまふゆに苦笑しながらも、なつきは手を上げた。

「我々は！ ちょっと遊んでただけであります！」

おそらく、学校に行かなかったことについて怒っているのであろうと察したなつきは、最初に言い訳になっていない言い訳をした。

しかし、怒っていると言うより、二人とも深刻そうな顔をしていた。

「なつき、よく聞いてね」

「う、うん」

「中学校を卒業したら、高校には行かないで」

「ど、どうして……?」

訳がわからない。と言った様子で目を見開いているなつき。

「それは、診断書を見て、父さん達がそうすべきだと判断したからだ」  
「だからそれがなんでって聞いているの! なんでそんな——」

なつきは、大声を張り上げて猛抗議する。

「ほら、この間の模試だって満点だったんだよ？ 勉強だっていっぱいしてるし、人間関係だってひどくないはず……」

「……………」

「お、大げさに考えすぎだよ。だって今までだって問題なく頑張れたんだもん。これからだって……」

「なつき」

その瞬間。優しい声で母親がなつきに近づき、

——彼を抱きしめた。

「もう、いいの」

「……………」もう、いい？」

「もう……頑張らなくて良いの」

「なん、で？」

震えているなつきの頭を、母親は優しく撫でた。

「あんなに抱え込んでるなんて、知らなかったわ……。ごめんなさい」

「かあ、さん……」

「ずっと……辛かったのよね。ずっと、苦しかったのよね……？」

「ぼ、僕は……医者に……ならな、いと……」

「大丈夫、もう頑張らなくて良いの……。無理をしなくて良いの……。一回、休みましよう？　ね？」

母親は、泣いていた。

おそらく、かなり今回の出来事が堪えているのだろう。母親は身体を震わせ、泣いていた。

まふゆも、なつきを安心させるように、彼の背中をさすった。

□ □ □

「そんなことが……」

誰もいないセカイで、ニーゴの全員はまふゆから一部始終を聞いた。



「とりあえず、よかった。でいいのよね」

「とりあえずは良いと思うよ？ あとは彼のメンタル回復次第だね」

「みんなには、迷惑かけたね」

まふゆは、ニーゴの全員に頭を下げた。

そんなまふゆを見て、あわあわと慌てる奏。

「わ、私達もなつきくんが心配だったから……」

「……ま、ある程度はね」

「なんにせよ、一旦一件落着だね」

よかったよかった、と胸をはる瑞希。

そんな中、奏は辺りを見渡した。

「そういえばまふゆ、なつきくんが『みんなここに集めて』って言ってたんだよね？」

「うん、そう」

「なつきくん、何のよう？」

「……知らない、突然言ってきたから」

そんな話をしていると、なつきがやってきた。

「お待たせしました、皆さん」

その手には、何故か袋のような物を持っていて、何処かすごい剣幕で四人を見つめていた。

「な、なによ。いきなり睨んできたりして……」

突然なつきに睨まれ、困惑する絵名。

「僕は貴女達を認めない」

「「え？」」

なつきの謎すぎる発言に、まふゆでさえも目を丸くした。

「ど、どうしたの弟君？」

「ふんっ」

瑞希の問いには全く耳を貸さず、なつきは袋からある物を取り出し、まふゆ以外の三人にそれを渡した。

「これは……」

「……ドーナツ？」

それは、何の変哲も無いドーナツだった。

「貴女達にそれが、食べられますか？ まあ食べられないでしょうね」

恐ろしい形相で意味不明なことを言っているなつき。

そんななつきに、三人はますます困惑した。

「と、とりあえず。食べれば良いのかな？ いただきますーす」

よくはわからないが、とりあえず食べることにした瑞希。  
それに釣られるように、奏と絵名が食べ始める。

「うん、おいしいねっ！」

「そうね、いつもと何の変わりの無い。あのお店の味……」

「……（もきゅもきゅ）」

三人が思い思いに、自分の感想を口にする。

「認めざる、を得ない……！」

その瞬間、なつきはその場に項垂れた。

「ああもうっ、何が言いたいよアンタ！」

□ □ □

なつきの話はこうだ。

遊園地の時、姉がネットで知り合ったこの三人と一緒にいる時の方が楽しそうで、むかついた。

——なので試すことにした。

「……つまり、話を要約すると——」

「はい、姉様」

「ネットで知り合ったこの三人に嫉妬した、と」

「その通りです姉様」

こくりと頷くなつきに、まふゆはため息をついた。

「そんなことないのに」

「だって、そう見えたんだもん……」

その場にあぐらをかき、ふて腐れるなつき。

「それで？　なんで試す手段がドーナツなの？」

「普通、突然食べ物を持ってきたら毒が入ってるかもとか考えるでしょ？」

「いや、別に考えないと思うけど……」

どこか苦笑を浮かべる奏。

「あははっ、やっぱり独特で面白いね弟君はっ」

「で、でもっ！　少しは警戒したんじゃないんですか！　だっていきなり『認めない』って言う人がドーナツ持ってきたんですもん！」

「いやあ、困惑はしたけど警戒はしなかったかなあ」

瑞希はへらへらと笑いながら、言葉が続けた。

「むしろ怒ってる表現を上手くできない感じが、かわいかったかなあ」

「それは、そう」

「——ッ！ やっぱりきらい！ これからも姉様をよろしくお願いします！」

なつきは顔を真っ赤にして、誰もいないセカイを後にした。

「相変わらず、可愛い子ね」

「自慢の弟」

「ねえ、一回うちの弟と交換してよ」

「絶対に嫌」

まふゆは絵名にそう言った後、くすりと笑った。

「それじゃあ、私も戻るから」

□ □ □

「ふう……」

現実世界に戻ると、まふゆは小さく吐息を吐いた。

今回、なつきの異変に気づくことが出来たのは、ニーゴのみんなのおかげだ。

——また今度、何かみんなにおごつてあげよう。

「なつき、そろそろ寝よ——」

まふゆは、なつきの方を向いた瞬間、言葉を失った。

なぜなら、



弟の身体だった物が——首に縄が巻かれ、天井からぶら下がっていたからだ。

——あ……あ……あ、ああ………。

動いていたんだ。

話していた。

笑っていた。

ほんの一瞬前には……。

生きていた。

遊園地でいっぱい笑って。

家族のみんなの前で泣いて。

友達の前で嫉妬して怒って

そんな素振り——無かったのに。

ほんの少し……

目を離した隙に……



## 七

? 「姉様——、——きて、——姉様」

「……………」

まふゆが目を覚ますと、そこは見慣れた自分と弟の自室だった。

まふゆは寝ぼけて頭が回らない中、目をこする。

——さっきのは、夢？

「……………」

ひどい夢だった。

目の前で弟のなつきが首をつり、死んだ夢だ。

夢だと思った瞬間安心し、まふゆは布団にくるまった。

「ほら、今日は二人で一緒に出かける約束でしょ？ 早く起きて、姉様」

「んう……あと五分」

「そんなありきたりな寝言言ってないで、起きて姉様！」

「やだあ……」

強引に揺すって起こそうとする弟を、まふゆは抱きしめて一緒に布団の中にくるまつた。

「きゅ……」

□ □ □

「おはよう、お父さん。お母さん」

「……おはよう」

まふゆは座っている父親とキッチンにいる母親に朝の挨拶をした後、弟の席を引いてあげ、自分の席に座った。



「あれ？ お母さん？ 朝ご飯なつきの分だけ来てないよ？」  
「……え？ そ、そうね。ごめんなさい。すぐ作るわ」

母親は作り笑いを浮かべた後、急いで作り始めた。

「大丈夫、慌てなくて良いよ」

弟はドジな母親に苦笑を浮かべながら、ついていたテレビを見始めた。

「なつき、最近不安なことはない？」

「この間も似たような事聞いたよ姉様。そんなにホイホイ状況は変わんないって……」  
「あははっ、それもそうだね」

頬をかいている弟を見て、まふゆは楽しそうに笑った。

最近まふゆは、自分が感情を隠すことなく生きていれている気がする。

多分、それは最近いつも以上に仲が良くなっている弟のおかげだ。

「ところで父さん、なんか最近元気ないよ？ どうしたの？」

「……………」

「お父さん？」

弟の声には反応せず、まふゆが声をかけると。はっ、と気がついたようにまふゆを見た。

「……………なんだ？」

「なつきが大丈夫？ って聞いているよ？」

「あ、ああ大丈夫だ。心配かけてすまないな」

父親はどこか遠い目で作り笑いを見せた。

「は、はい。お待ちせ」

そして、母親が弟の分の朝ご飯を持ってきた。母親はまふゆを撫でた後、キッチンに戻った。

——最近はいつもそうだ。

父親も母親も、まふゆが感情を取り戻してからは素っ気ない気がする。それは何故か、まふゆにはわからない。

「姉様？ どうしたの？」

「う、ううん。なんでもないよ」

少しぼーっとしてたようだ。

両親に触発されて、自分まで素っ気なくなる訳にはいかない。

そんなことをしたら、弟がかawaiiそうだ。

□ □ □

「それで、姉様。今日はどこに行くの？」

「今日行く場所はね。まずはCD売り場だよ」

「CD売り場？」

弟は首を傾げた。

そういうえば、今日はどこに行くのかやんわりとは伝えたが、詳細な所までは伝えてなかった気がする。

「あのね、今ニーゴでは明るい曲を作ってる、その素材探し……みたいな物かな？」

「ふうん、姉様のグルーブって結構暗い曲を作ってる印象があったから意外」

「ふふっ、なにそのイメージ」

「だって、そういう曲しか歌詞作らないじゃん姉様」

「……？ そうだったかな？」

弟にそう言われ、確かに言われてみればそんな気がする。

ニーゴのオリジナル曲もカバー曲も、思い返して見ると静かな曲を作ることが大半だった気がする。

「何か心境の変化でもあったの？ 姉様」

「うーん……よくわからない。なんでだろ」

まふゆは思考を巡らせるが、何故か答えは出なかった。

——なんとなく、明るい曲を作りたい。そう薄々思っただけだが、元々は静かで心に刺さる曲を作りたいはず。

……まふゆ自身も、何故かはよくわからなかった。

□ □ □

「それじゃあ、とりあえず特集コーナーを見てみようか」

CDショップに向かうと、まふゆは目の前にあったおすすめ曲の特集コーナーに向かった。

今週の特集は、どうやら『元気の出る音楽集』のようだった。

「あ、運が良いね姉様。ちょうどいい特集がやってるよ」

「うん、そうだね」

びよんびよんと楽しそうにはしゃぐ弟を見て、まふゆは心底楽しそうに微笑んだ。

まふゆは特集コーナーにあつたヘッドフォンを手に取り、特集されていた音楽を聞き始める。

「僕も聞く」

そうしていると、弟がヘッドフォンの外側に耳を当て、頬を合わせるように密着してきた。

そんな可愛らしい弟の行動に、ついまふゆはにやけてしまった。

「いいの？ 人前で密着して」

「——っ、いいの。誰もこっちを見てないし」

顔を真つ赤にし、そっぽを向く弟。

幸い、周りの人は弟の事を気にしておらず、弟はほっとしている。

「あ、まふゆ？」

すると、ヘッドフォン越しに知り合いの声が聞こえてきた。

「——姉様」

「わかってる。気づいてるよ」

教えてくれた弟を撫でた後、まふゆはヘッドフォンを外した。

声の主を見ると、それはまふゆのサークル仲間である、瑞希だった。

「どうしたの？ 一人？」

「うん。ちよつと買いたいCDがあつてさ。……まふゆは一人？」

「ううん、見ての通りなつきと二人だよ」

「……そっか、また会ったね。弟君？」

「……どうも」

いつも通りにつこりと笑顔を見せる瑞希を、弟はまふゆの後ろに隠れながら見つめた。

「ふふつ。まだ瑞希に苦手意識があるみたい」

「あははっ、そうなんだ。別に嫌われることはしてないはずなんだけどなあ」

頭をかきながらヘラヘラと笑う瑞希を見て、まふゆは自然と笑顔を見せた。

「それじゃあ、私達はそろそろ行くね」

「ではまた。瑞希さん」

「……うん、またねっ。二人とも」

□ □ □

「いいの？ 瑞希さんともうちよつと話してなくてさ」

「いいの、今日はなつきと一緒にいたい気分だから」

「なにそれ」

くすくすと、楽しそうに笑みを浮かべる弟。

釣られるようにして、まふゆは微笑みを浮かべた。



「さて、次はどこに行くの？ 姉様」

「次は、喫茶店よ」

「喫茶店？ 珍しいね」

予想外、というような顔をする弟。

「なんでそんなところ、二人とも食べ物の味なんてわかんないでしょ？」

「こう言うのは、気分。特に意味はないよ」

「そっか、姉様がそう言うなら、僕は一緒に行くよ」

そう言って、弟はまふゆの腕に抱きついた。

□ □ □

喫茶店に入ると、カランカランツツと扉に付いていたドアベルが鳴り響く。

「いらっしやいませ、何名様ですか？」

「二人です」

「空いてるお席にどうぞ」

そんなテンプレートのような台詞を聞きながら、まふゆは空いている席に座った。

「ご注文はお決まりですか？」

「ホットケーキを二つと紅茶二つ」

「かしこまりました、少々お待ちください」

店員は一礼をした後、厨房へと戻っていった。

「こういう時ってさ姉様。人数なんて見ればわかるだろうって思わない？ 見えない悪霊でも数えてんのかよって」

「ふふっ、そうだね」

弟のどうでも良い話に苦笑するまふゆ。

数分後、注文していた品が届き、目の前の席にホットケーキと紅茶を置いた後、自分

の目の前に置いた。

「それじゃあ、食べようか」

「うん、姉様」

「いただきます」

そんな声が喫茶店を響いた後、まふゆは食べ始めた。

「……………」

「……………ま、味わかんないよね」

しかし、結局味はわからないので、食べた後の話題が見当たらない。  
なので、

「はい、あーん」

「……………」

こういう状況で話すべき会話が続かないため、まふゆは弟に向けてホットケーキを刺したフォークを突きつけた。

「え」

「……………」

「……………」

「……………」

長い沈黙の後、ぽとり……とフォークに刺さっていたホットケーキが無様にもテーブルに落ちた。

「……………食べてよ」

「……………やだよ」

「……………姉が『あーん』してあげてるのにな？」

「それによりもつと食べる気が無くなったよ」

と、そんな話をしていると、

「あら、まふゆ?」

また聞き慣れた声が聞こえ、声の主を確認すると、そこには絵名が立っていた。

「……………」

絵名はホットケーキが二つあるのを確認した後、笑って見せた。

「今日はなつきさんとデート?」

「違います」

「まあ、そんなところかな」

「そう、良かったわねなつきくん」

「僕の言葉はガン無視ですか……」

見事にスルーされ、弟は肩をがっくりと落とした。

「そういう絵名は？ また太るよ？」

「失礼ね！ ただの気分転換よ気分転換っ！」

「そっか、せっかくだから、一緒に食べる？」

「え、そうね……」

絵名は弟のホットケーキに視線を泳がせた後、なんともいえない笑みを浮かべた。

「……遠慮しとくわ。アンタとなつきくんの時間を取るわけにはいかないから」

「いえ、別にそんな事気にしなくても——」

「じゃあね、二人とも」

弟の止める言葉を聞くことはなく、絵名は遠くの席に行ってしまった。

「……最近、僕避けられてる？」

「多分、避けられてるのは私だと思う」

「姉様の愛想悪いから、ニーゴの皆様愛想が尽きたかな」

「おだまり」

□ □ □

「……………」

夕方頃、奏は父親との面会のため、病院に来ていた。

父親が入院してからは、一週間に一回は病院に来るようにしている。

「あとは、あの子に会って終わり」

父親との面会が終わった後、奏はもう一人のいる病室に足を運ぶ。

最近奏は、父親以外にもう一人看病している少年がいた。

「……………」

奏が病室に入ると、そこには少年が横たわっている。

その少年は中学生くらいだろうか、美しい紫髪でかなり小柄な少年だ。人目では女性と誤認してしまいそうなその双眸には生氣は宿っておらず、虚ろで力の無い目をしていた。

「また来たよ、なつきくん」



## 八

? 「……………」

奏は、力なく横たわっている少年の頬を優しく撫でた。

しかし、少年は何も反応せず、ただ虚空を見つめているような目をしたまま動かない。

「もう一ヶ月、か」

誰にいうでもなく、奏はそう呟いた。

彼が自殺未遂をしてから約一ヶ月、幸い医者を目指しているまふゆが近くにいたこともあり、一命を取り留めたが。生きているだけで意識のない植物状態。

「……………」

奏の頬を、無意識に透明な雫がつたう。

もう一ヶ月だ、植物状態の人間は日にちを追うごとにもう二度と起きなくなる確率が上がっていくという。

……もしかしたら、本当に二度と……。

「っ」

奏は頬をつたっていた自分の涙を拭った。

自分が悲しんでもどうしようもない。今一番辛いのは間違いなく自分ではないのだから。

『ちやんとご飯、食べなきゃだめですよ？　ね？』

彼の、優しい言葉が脳裏に蘇る。

いつでも優しく、いつでも自分を気にかけてくれた彼。

どんな時でも良い子で、やるべき事を真っ直ぐ見ていた彼。

そして、自分が悩んでいるとき、一生懸命に力になってくれた彼。

「……………くそっ」

それに比べて、自分はどうか？

こんな状況になっても、結局彼を救えてないじゃないか。

——奏は、ただ静かに……………自分の唇をかみ、口元から赤い液体を流れさせた。

□ □ □

「……………はぁ」

絵名は自分の今書いている絵を見ながら、小さくため息をついた。

「……………こんなもんでいいかしらね」

絵名は筆を置き、ベッドにゆっくりと腰をかけた。

最近、妙に筆が乗らない。ニーゴとしての絵を完成させなきゃならないのに……………。

「……なんつにも、考えられない」

しかし、この感覚はスランプとは少し違う。

まるで何もやる気が起きないような、脳内が動いていないような……そんな感覚だ。

「こういう時だから、頑張らないといけないのに……」

まふゆが辛いときだからこそ、自分は胸を張って彼女を引っ張っていかなくてはならない。

わかってはいる、わかっているはずなのに……身体が動かない。

「あー、もう！　なんで私になつきくんが死んで悲しんでるのよ！　アンタはそんなに話したことないでしょうが！」

絵名は両手で頬を叩き、気合いを入れた。

「そうよ！　こういうときにこそ頑張らないといけないわ！　みんなが沈んでるこういうときこそ！」

絵名が大声で気合いを入れた。

次の瞬間、

——ぐううううう……。。

「……………」

突然、絵名のお腹の音が鳴り響いた。

そういえば、最近おやつになる間食をしていなかった気がする。

この間の喫茶店も結局、居づらくて何も注文せずに帰ってしまったし。

「こういうときは、何か甘い物でも買いに行きましよう。よしっ、いつものあの店に……………」

出かけようとした矢先、絵名の足が止まった。

「そっか……。あの店の味。もう食べられないんだ」

□ □ □

「あ〜、あ〜」

瑞希は自分の布団に包まりながら、足をパタパタと動かした。

「みんな、相当なつきくんの件が応えてるなあ」

瑞希はヘラヘラと、作り笑いを浮かべながらそういった。

最近、ニーゴの活動時間が極めて短くなっている。なので、m v担当の瑞希としては暇なのだ。

「こういう時は、可愛い服でも見に行くのに限るねっ」

そうやって、瑞希はベッドから立ち上がった。

『そういえばさ、瑞希も言われてイヤなら、学校くらい普通の格好でこれば良いのにね』  
『それは思うなー、他と違うとみんなも気になっちゃうしね』

ふと、瑞希の頭が無意識にそんなことを思いだし身体が自然と止まった。  
が、

『焼きそば』

その少年の一言を思い出し、瑞希は吹き出した。

「あははっ、そういえばあの子くらいかな。僕のことを全肯定してくれる人」

あの時は笑いが止まらなかった。

まるで『心底どうでもいい』と言わんばかりに瑞希の性別は気にせず、自分を自分と

してすっかり見つめてくれた。

しかもそんなサバサバしているわりに繊細で、ちよつとからかったらすぐに顔を真っ赤にする。

「そうだ、彼が起きたら女装させてみようかな。きっと面白い反応が返ってくるぞお」

瑞希は、いたずらっ子のように不敵に笑った後、表情を消した。

「けど、僕は弟君を肯定するどころか……。気持ちに踏み込むことすら出来なかったんだよね」

瑞希は無意識に拳を握った。

「まずいと察知できていたはずなのに、危険な状態だと理解できていたはずなのに……。」

彼の優しさに甘え、深く追求できなかつた。

「お祭りのあの時、彼は僕を肯定してくれたのに……」



何故聞かなかった。

何故聞けなかった？

自分だけが満足して、自分だけが彼の肯定にうれしくなって……なぜその感覚を彼と共有しようとは思わなかった？

何故、あの時彼の心を深掘りし……肯定しようとしなかった。

「……ちくしょう」

□ □ □

「ふっ……ふぁ……っ」

自分と弟の部屋で、まふゆは大きく欠伸をした。

ニーゴとしての活動も終わり、夜も更けてきた。そろそろ眠る時間だ。

「さて、なつき。そろそろ寝よう……？」

隣を見ると、弟の姿を視認することが出来なかった。  
代わりに……、

『……………』

壁の隅に立っている、弟によく似た少年を目撃した。  
その少年の身体はゆらゆらと幽霊のように揺れており、目元は見えず、口元は薄気味悪い笑みを浮かべている。

「……………また、オマエか」

まふゆは、鋭い殺意を宿した瞳でその少年を見た。

『何を笑ってやがる？』

「……………」

『姉であるお前だろ？ 僕を殺したのは』

「……うるさい」

『お前が目を離れたから、お前が僕を追い詰めたから、僕はお前のせいで死んだんだ』  
「うるさい！」

部屋中に、まふゆの怒声だけが響いた。

「あの子は……そんなこと言わない！ あの子はいつも優しくて……いつも私に寄り添ってくれた！」

『……………』

「そんなこと……言うはずがない！」

そのまふゆの言葉に、目の前の『化け物』は鼻で笑った。

『だからだろ？』

「っ」

『なんで理解できねえかな？ 僕はお前に寄り添った。けどお前は僕に寄り添わなかった。だから僕は死んだんだぜ？』

『化け物』はまるでまふゆを見下すように、鼻で笑う。

『お前のせいだ、お前のせいなんだよ』

「……だまれ」

『育てた両親のせいでもニーゴのみんなのせいでもない。ずっと見守ってた【フリ】をし、僕の傷に気がつかなかったお前のせいだ』

「だまれ……」

『僕が気を病んだのも、狂ったのも。壊れたのも。死んだのも全部全部』

——お前のせいなんだよ。

「黙れ！」



□  
□  
□

まふゆが気がつくつと、先ほどまで綺麗だった自分と弟の部屋は無残なほどに荒れていた。

本棚、椅子、あらゆる物が倒れており、壁には何かをぶつけたような傷や殴られたような穴、そしてひっかいたような傷が無数にある。

辺りには割れた照明の破片に、弟と共に使っていた医学の本や参考書がそこら中に散らばり、部屋が真っ暗になっている。

「また……やっちゃった」

ふと、まふゆは優等生の声ではなく、落ち着いた声のトーンに戻る。

自分の手首を見ると、前腕部分にびっしり切り刻まれた形跡があり、見るに堪えない跡があった。

「……………」

まふゆは、何故か手に持っていたカッターナイフの刃を出した後、自分の手首に向けて、

刃を振り下ろした。

——気持ちいい。

□ □ □

「……………ん？」

なつきが目を覚ますと、そこは灰色の何も無い空間だった。

「……………」



地平線がずっと奥まで続いており、ある物とすれば鉄骨やコンクリートブロック、それらが散乱している謎の場所だ。

その場所に、なつきは見覚えがあつた。

「あー、ここか」

なつきはすぐにここが何処だかを理解し、欠伸をした。

「たしか、誰もいないセカイ……だったかな。音楽を流したらこれるっていう」

なつきはキョロキョロと辺りを見渡しながら、ぺたりと座つた。

——つていうか、今まで僕何してたんだっけ？ たしか……。

「あ、そうか。ここって」

なつきは今までの事を整理した後、ふつと笑顔を見せ、

「ここが異世界転生先だったのか」

また、訳のわからない解釈をしていた。

「首を吊ってここにきたんだから間違いない。……ん？　つまりそうになると、あのミクって子は死神って事になるのか？　ってことはここにこれたニーゴの皆さんは……。全員死んでいる？　僕は気がつかなかっただけ？」

自分で盛り上がり、自分でぞつとしている中、

「なつき、くん」

「ひえ」

たまに聞く声が聞こえてきた。

声の主を確認すると、姉まふゆの親友、奏だった。

「あー、違います誤解で——いえ冗談です。奏さんっ普通に幽霊みたいだよね、なんて思ってるわけ無いじゃないですかヤダー。やめてください近づかないでください。それか拳を振り下ろそうとするその気持ちをおさえてくださいお願いします」

と、なつきが何度も何度も謝っている。

その時、

——ぎゅっ、

「きゅっ……」

突然、奏に抱きしめられ、目に見えて動揺し、顔を真っ赤にする。

「あ、あ、あああああ。あああつ！ ど、どど、ど、どうした………んですか？」

当たり前だ、彼も立派な年頃の男子。

ある程度気の知れた仲だとはいえ異性に抱きしめられることは恥ずかしいに決まっている。

「よかった……、また、話せたね」

奏は涙を流しながら、ぎゅつと強く抱きしめた。

□ □ □

——どうやら、植物状態のなつきにあの曲を聴かせ、意識だけこちらに飛ばしたようだ。

そして、なつきは奏からある程度の現状を聞いた。

勿論、それはまふゆの現状には触れていない。

「すいませんでしたあああああああ——ッ！」

そしたら、なつきはすごい勢いで土下座した。

奏はあわあわと目線を合わせる。

「な、なつきくん……？」

「ま、まさか植物状態になるのは予想してなかった。ご迷惑をおかけして申し訳ありません！」

なつきは心底申し訳なさそうに頭を下げる。

「……………ねえ、どうして。自殺しようとしたの？」

「？」

奏は、聞く恐怖から目を背け、真っ直ぐとなつきを見ながら問いかけた。  
今まで聞けなかったこと、聞くのが怖かった事だ。

「何でって？ そりゃあ……」

なつきは不思議そうに首を傾げた後、

「そっちの方が幸せになれるからです、かね？」

なつきは、何も迷うことなくそう言った。

その言葉に、奏は口元を震わせた。

「なん……で？」

八  
「えっと。色々あって『勉強しなくていいよ』って言われちゃいました。それって普通に『もう会社来なくて良いよ』的なアレじゃないですか。ですのでその。自殺して少しで

も母さん達の懐があつたまればなー……と」

何処か恥ずかしそうに笑うなつき。

しかしそれとは対極的に、奏は彼の言葉に絶句していた。

「だから………死んだの？」

「はい」

「お金のためだけに……死んだの？ 自分の人生を……捨てたの？」

「そうなりますね。まあ、植物になるとは思わなかつたので、本当に奏さんには頭が上がりません」

「そんな……そんなことって……」

頭を下げるなつきを見ながら、奏は胸が引き締められそうな絶望感に押しつぶされ、その場にペたりと座り込んだ。

「それじゃあ、まるで家族の言いなり……」

「………」

「私は……貴方をすくいたい……のにつ！」

「それで？」

「っ」

「言いなりで何？ 何が悪いのですか？」

初めて奏は、なつきの本物の殺意にも似た怒りを見た気がする。

「どいつもこいつも、何もしないでくせに毒親だの。子供の未来は子供の物だの。救ってあげるだの。きれいな事ばかり」

「きれい、こと……っ？」

「自分たちが正しいつもりですか？ 自分たちの方が幸せのつもりですか？ だったら



なぜ誰もその毒親から子供を助けられないのです？ 何故今まで僕を助けなかったのです？」

そして、なつきは鼻で笑った。

「答えは簡単、お前達が『定型発達』だから」

「定型……発達？」

「定型発達ってのは、周りの空気に流され、暗黙の了解を察し続ける。だからこそ、『本当にだめか』それすらわからず、異常事態にならない限り自分から動くことをしない」

彼の言葉には、重みがあった。

どす黒く、何処か狂氣的で、しかし真に迫る重みがあった。

「所詮、お前らは口を出さただけでただ傍観するだけ。何も干渉せず、無意味に正義面をやるだけ。そんな奴らのどこを信じれば良い？ どう救いを求めれば良い？」

——もし、僕の親が毒親で、幸せじゃないとほざくなら。

——お前らはもつと猛毒なんだよ。

## 九

？「……ん？」

なつきが目覚めると、そこは見慣れない天井だった。

外は少し薄暗く、夕方くらいだろうか。部屋には観葉植物や机や椅子があり、誰かが住んでいるような生活感がある。

明らかに見たことがない部屋であり、病院でもなさそうだ。

「……言い過ぎた、よね」

しかし、そんな状況にもかかわらずなつきは、今は目の前の光景はいつでも良く、『誰もいないセカイ』での出来事が忘れられずにいた。

姉の親友である奏を、まるで罵るような言い方をしてしまった。

今思うと、明らかに無駄な感情の起伏、無意味な怒りを他人に押しつけてしまった。



もぞもぞ——、

身体をよじり、自由な足をどうにかばたつかせるが、足は何故か一切動かず、ベッドがきしむ音と布団の衣擦れる音しか部屋には反響しない。

——完全に身動きを封じられている。

「うええええええええええええ——ッ！」

やっと事の重大さを理解したなつきが大きな声を部屋中に響かせる。

「ちよ、まって。ドユコト？ マジでドユコト？」

なつきは状況が全く理解できず、とりあえず頭が回る限り、これまで起こった事を再確認する。

——首を吊る。

——誰もいないセカイで目が覚める。

——奏さんに話を聞く。

——奏さんに八つ当たり。

——奏さんを慰めた後、もう一度眠りにつく。

——次に目が覚めたら、身動きが取れなくなっていた。

「……いや、どゆこと？」

なつきは必死に思い返すが、結局訳がわからない。

たしか自分は、奏の話によると植物状態になっているはず。そして病室で寝たきりだと聞いている。

「足は……多分自殺の後遺症だとして、なぜ拘束する必要性が？　つてかそもそもここって病院？」

——この部屋はぱっと見、病室には見えないし、植物状態だったら手錠をする必要は

無いはず。

「あー、あれか。植物状態の人が夜中に暴れ回るから、隔離して手錠したとかそういう感じ？ ……そんな話聞いたことないけど」

と、そんなでできる限りの思考をしていると、突然、外に繋がっているであろう扉が開いた。

「……………」

「あ、姉様！」

そこにいたのは、なつきの実の姉、まふゆだった。

まふゆは制服姿にマフラーを巻いており、いつものように無表情で見つめてくる。

——しかし、その表情は何処か力が無いように見えた。

「姉様、ちようど良かった。この手錠、お医者さんに外すように言って」

「……………」

「……姉様？」

なつきのその願いは聞き入れず、まふゆは無表情を貫いている。

そして、ぽふっ……となつきに被さるように倒れ、

ぎゅっ——

「きゅ……」

なつきを抱きしめた。

「姉、様？」

突然、抱きしめられ、困惑するなつき。

しかし、そんなことは気にせず、まふゆは——

ガリッ——！

突如なつきの首筋に噛みついた。



「つう！ ……ね、姉様……っ！」

首筋に鋭い痛みが走ったかと思うと、その後に首筋を優しくなぞるように舐められ、なつきは自然と身体を反応させる。

「ねえ……さ、ま？」

「やっと……目を覚ましてくれたね」

まふゆはそういうと、再度なつきを抱きしめた。

「ずっと、なつきが目を覚ますのを待ってたよ……。ずっと」

「………めん」

なつきは、自然と謝罪の言葉が出た。

彼が眠っているとき、ほとんど意識のない状態で、ずっと家族の泣いている声が頭の中に響いていたからだ。

なつきが謝ると、まふゆは小さく微笑んだ。

「ねえ、お姉ちゃん。貴方の気持ちを理解しようと頑張ったよ？」

「え？」

「ほら、見て？」

そして、まふゆはつけていたマフラーを取り、制服の袖を捲る。

「——ひっっ」

その瞬間、なつきのは悲鳴を上げ、恐怖で顔を歪ませた。

——なぜなら、彼女の首筋には縄を強引に括り付けたような赤い後、そして、手首にはなつきと同じような切り刻んだ跡があったからだ。

「今度こそ、ずっと見守ってるから」



——お母さんは正しかった。

弟が死んで、心の底からそれを理解した。

良い学校に入つて、良い会社に入る。母親に何度も何度も、そう言われ、ずっと私は良い子を偽つてきた。

音楽をやりたい、看護師になりたい。そんな自分の欲に蓋をして生きてきた。

良い子でいればいるほど、自分を隠せば隠すほど……辛くて、苦しくて、何も考えられなくなる。

——しかし、それで正しかったのだ。

全てを束縛し、全ての自由を奪う。弟を守るにはそれが一番だったんだ。

お母さんのやってたことは間違つてなかった。すべてを支配しなければ、管理しなければ……あの子は死んじやうんだ。

私をひとりぼっちにするあの子は良い子じゃない。

姉を置いて一人で自殺<sup>にげる</sup>弟なんて良い子じゃない。

自分自身の幸せを望まない弟なんて良い子じゃない。

——今のあの子は『悪い子』だ。

□ □ □

「あ………うう………あああああ………誰か………だれかあ………っ」

その日から、朝比奈まふゆの洗脳が始まった。

一日目の朝……早朝五時から夜九時まで、なつきにはずっと目隠しをし、ヘッドホンで周りの音を全て遮断した。

まずは精神をとことんまで壊す。無音の世界だと人間は四十五分以内に発狂すると  
言われている。

「つ……。かあさん……。おとうさん……。まふゆ姉……。だれか……。だれかつ」

そして、ヘッドホンからは不定期に、何かを切りつける音や人の悲鳴、不協和音など流れるようになっていく。

「や、だ……。ヤダヤダヤダヤだつ!! こわい……。コワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイ——っ! 誰かつ!! 誰かつ! だれかああああああ——ッ!」

——真つ暗闇でそんな物を聞かせれば……。誰だつて狂うであろう。

「……………」

それを、まふゆはただ黙ってみるだけ。

助けるわけでもなく、何をするでもなく、ただ黙つて見つめるだけ。

まるで弟が狂っていくのを観察しているかのように。ただ傍観するのみ。

□ □ □

「うう……ひつく……ひう……っ」

「よしよし……よしよし……怖かったね」

そして、九時からは彼の拘束を外し、一緒に寝る。

壊れそうになっている中、たった一人信頼できる実の姉。これほど安心する物はないだろう。

「う……う……。まふゆ姉……まふゆ姉え……っ」

「大丈夫、大丈夫だよ……」

孤立させて、信じられる物はまふゆだけだと思わせる。洗脳方法としても悪くない。

現に、彼は先ほどまでの恐怖から逃れるように、まふゆをずっと抱きしめている。

まふゆは彼を安心させるように、ずっと頭を撫でていた。

□ □ □

「……………やだ……………あだあ……………つ」

二日目の朝、一日目と同じように彼にはヘッドホンをつけ、目隠しをした。

一日目ほどの反応はないものの、精神的には追い詰められているらしく、目隠しをしていても泣いているのはわかる。

「……………ねえさまあ……………つ。まふゆ姉えええ……………」

そして、昨日の洗脳の甲斐もあり、彼が口に出す人物の名前は、まふゆただ一人になった。

すでに理解したのだ、ここでは……………まふゆしか助けられないという事実を。

□ □ □

——ビリリリッ！

「ああああああああああああ——っ！」

その日の夜、なつきはまふゆの目の前で痛みに打ち震えていた。

「まふゆ……姉？」

「いい？ 貴方が逆らったら、今みたいに首輪から電流が流れるからね」

なつきは拘束と目隠しを外され、まるで犬のような首輪をつけられていた。

しかもそれからは電流が流れるらしく、はずそうとしても外れない。

「なん……で……」

なつきの瞳には明らかに涙がにじみ、恐怖が支配している。

しかしそんなことなど一切気にせず、まふゆは言葉を続けた。

「まず、今から服を脱いで裸になって。下の方は脱がせてあげるから」

「な、なんで、そんな、こと……」

——ビリビリッ！



「つぐううあああああああああ——っ！」

なつきが問いかけようとした瞬間、まふゆは持っていたスイッチを押す。その瞬間、首輪から電撃が走り、なつきは苦痛の表情を見せた。

「質問して良いなんて、わたしは一言も言っていない。悪い子」

「あ……あああ……」

電撃の苦痛の中、なつきが見たまふゆの顔は、とても弟を見ているとは思えない。害虫でも見下すような残酷な瞳だった。

その表情に恐怖し、なつきは自然と涙を流す。

気が狂いそうな音と真つ暗闇を耐え、また助けてくれると思つたのに……。彼女だけは……味方だと思つたのに。

——ビリリリッ！

「ああああああああああ——っ！」

「ねえ、どうしてそんなに悪い子なの？ お姉ちゃん、泣いて良いなんて一言も言っていないよね？」

その後も、まふゆの洗脳は続いた。

自分で動くことは一切許されず、すべてまふゆの思うがまま。

食事、睡眠、お手洗い、性処理にいたるまで全て支配され、なつきの自由など一つも  
ありはしなかった。

□  
□  
□

「……………」

今、なつきが立っているその場所は、真つ暗な世界だった。  
なつきの家族の写真や、ぬいぐるみ、そしてライトノベルが乱雑に置かれている奇妙な部屋。

【とても良い愉悦だった】

【ああ、これだから曇らせって最高だわ】

その世界の空には、黒い文字で様々な文字が書かれている。

まるで何感想を書かれているようなその文字達は、妙に【愉悦】や【曇らせ】……どこか人の不幸をあざ笑うような文字が目立つ。

——この世界の名は傍観者のセカイ。なつきの世界である。

## 傍観者のセカイ 壺

?

これは、朝比奈なつきがまだ中学一年生になったばかりの話だ。

「今日から中学生ね、頑張つて。お母さん応援してるから！」

「もうっ、大げさだな。母さんは……」

入学初日、なつきは母親の声援に苦笑しながらも、初めての制服を着て心なしか胸を躍らせていた。

四月某日、今日から中学生だ。小学生の時にお世話になった校舎にさよならを告げ、新たな学び舎で勉強や部活に勤しみ、恋愛も盛んに行われる時期だ。

「いっぱい勉強して、早くお姉ちゃんと同級に立てるような良いお医者さんにならなきゃ

ね？」

「……うん、そうだね」

「さあ、行くよ。なつき」

「うん、まふゆ姉」

「行つてきます」

姉である朝比奈まふゆにそう催促され、なつきは履き慣れない靴を履き、自宅の玄関から飛び出した。

「どう？　緊張する？」

そして通学中、近くのコンビニ付近を二人で仲良く歩いていたとき、まふゆがそんなことを聞いてきた。

「うーん、わかんない。結構普通」

「ふふつ、なつきはいつも落ち着いてるもんね。自慢の弟だよ」

「——ん、ありがとう」

なつきは満面の作り笑顔を浮かべ、まふゆに言葉を返した。

——中学生、か。どうせ何も変わらないだろうけど。

入学当初、彼は既に希望など見いだしていなかった。

どうせいつもの日常が訪れ、ただ意味も無く医者という肩書きに向けて頑張るだけ、何の意味も無い人生。

『お母さんは貴方に期待してるのよ』

『お姉ちゃんを見習って立派になりなさい』

子供の頃から洗脳のようにそう言われ、良い大学に入って良い医者になって、お姉ちゃんを見習いなさいと……耳障りなほど聞いてきた。

頑張りがたくなんてない、もう努力なんてしたくない、皆と普通に遊びたい。そんな事を何度も望んだが……叶った試しは無い。医者になんてなりたくない、本当は小説家になりたい。自分の好きなことをやりたい。

——けど、言えなかった。そんな子は『良い子じゃ無い』と今までの事を否定されそうで……言えなかった。

そして、いっぱいいたはずの友達も、学力の無さだけで「関わるな」と言われ……学

力のある友達も「友達を選別するな」と罵声を浴びせられて絶交された。そして小説は、趣味を隠していたせいでほとんど捨てられた。

『良い子になりなさい』

あの母親の良い子という言葉は呪いだ、まるで自分の人生を支配するかのようにつてくる。まるで『私の教育は間違つてない、すべてお前が良い子じゃないから悪い』と人格すらも全否定するような言葉なのだ。

母親が嫌いだ——大嫌いだ。その母親に便乗する父親も嫌いだし、二人とも地獄に落ちてほしいとさえ思う。

そしてそれ以上に……………

「大丈夫、中学でどんな事があつても、私はなつきの味方だからね」

なつきはこの……朝比奈まふゆという人間が大嫌いだ。

才能に恵まれてなんでもそつなくこなし、母親がいつもいつも比較しやがる元凶のドイツが。

いつもいつも姉面するくせに、良い子を偽ってるくせに。

——心の奥底では冷たい瞳をしているこの女が、大嫌いだ。

□ □ □

そんななつきの思考に変化が現れたのは、中学に入学して約半年ほどたった頃。

彼は家族を憎みながらも勉強に励み、同学年の主席になるほどには努力して。医者の勉強も、中学生ながら大学の合格率を九十%という異例の確率をたたき出した。

そして、学校でのコミュニケーションも問題なく、友達にならない程度にそつなく行っていたそんな時。

「好きです、付き合ってくださいいっ」

ある女子に校舎裏まで呼び出され、告白されたことになつきの人生は大きく動き出す。

「僕と、ですか」



告白してきた女子は、同じクラスの女の子だ。

桃色の髪のツインテールに優しい緑の瞳が特徴的で、いわゆるなんでも出来る優等生で成績優秀のスポーツ万能……どんな人からも好かれているいわゆるカースト上位の女子。

そのスタイルはまだ中学生とは思えないほど発達し、出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいる。どんな男子も誘惑できそうな身体をしている。

……つまり、なつきが嫌いな姉のような女子だ。

「だめ……かな？」

心配そうに彼の答えを待つ少女——萌奈もなに、なつきは冷たい目でハッキリと言った。

「ごめん、萌奈さんとはとっても素敵な女の子だとは思うけど……。僕は色恋沙汰には興味ないから」

「……そっか」

「ごめんね」

俯く彼女に、なつきは一応申し訳なきそうに頭を下げる。

中学生になったからと言って全員が色恋に興味があるわけでは無く、むしろなつきはそれどころか女性と話すのも苦手だ。

そしてそれと同時に、なつきはこの萌奈という少女がなんとなく苦手だった。

「……そうだね、なつきくんはいつも勉強頑張ってるもんね」

この少女は誰にでも笑顔で接し、なつきでさえも話しやすい同級生。

だからこそ、明るすぎるからこそなつきは苦手なのだ。心の奥底では何を考えているかわからないから。

「一応、医者にならなきゃいけないからね」

「そうだよね、その為にがんばってるの。わたしも知ってるよ」

「ありがとう、だからごめ——」

萌奈が共感してくれたことを聞き、なつきがもう一度頭を下げてこの場を去ろうとし

た……………その時、

「じゃあ、死ねよガリ勉優等生」

そんないつもの彼女とは似つかわしくない……………まるで二重人格かと疑いそうなほど冷たく鋭い言葉が、なつきを突き刺した。

「……………え？」

その衝撃に、珍しくなつきも動揺した表情を見せる。

するとその刹那——、彼女がぐいっと目と鼻の先まで近づいてきた。

「ごめんね、ガリ勉優等生、お前がなんと言おうと拒否権無いのよ」

「萌奈……………さん？」

「お前がさ、正直今邪魔なんだよね。お前がいるとお兄ちゃんに褒めてもらえる回数が

少なくなつちやうわけ」

「おにい、さん?」

その時なつきが釘付けになったのは、彼女の綺麗な肌でも視線の下にある程よく発達した胸でも無かった。

「小学校まではさ、あたしが学年一位だったんだよね全てに関して、運動も勉強も友達関係も部活もゼーんぶ一番、だからいつぱいいつぱいお兄ちゃんが褒めてくれた。そしてそれが中学でも続くと思ってた……」

まるで死んだ魚のように濁りきり、大きく見開かれた瞳。

変わらず笑顔であるがその笑顔は何処か不気味で狂氣的、学校での萌奈とは全くの別人だ。

「けど、中学ではお前がいやがった。異常なほど勉強が出来て陰キャの匂いしかなかったお前が。正直わたしの上に人がいるとか邪魔でしか無いんだよね。褒められること減るし、お兄ちゃんと勉強の話になると優等生であるお前が話題に上がるし」

「……………」

「だからさ、お前をわたしに依存させて、ふぬけにしてやろうと思ったの。そうすれば勉強しかり柄が無いガリ勉強キヤのお前は、なにも誇れることが無くなるでしょ？　んでまたわたしが主席に返り咲いてお兄ちゃんに褒められてハッピーっ！　わかる？」

なつきは珍しく女性に恐怖を覚えていた。

笑顔が張り付いているようにどこかつかみ所の無い少女だとは思っていたが、まさかこんな理由で自分に接近してくるとは思ってもみなかった。

——年上に褒められたいなど、姉が嫌いななつきには一生理解できない話であろう。

「——つというわけで、お前に拒否権はないわけよ。お前の選択権は一応二つ、わたしと付き合つてふぬけになるか……この場で死ぬか」

「……………」

そんな狂気とも言え、刃物とも言える彼女の言葉の数々を最後まで聞き終え、ようやくなつきは口を開いた。

「さあ、好きな方選んで良い——」

「ごめん、選択肢をつけてくれたのは嬉しいけど。僕と付き合うより殺す方をおすすめするよ?」

「……は?」

きよとんとんでもない事をいうなつきに、萌奈はつい目を丸くした。

予想外だったのだ、この状況ならどう考えたって『生きたいから付き合う』という選択をするはず。

しかし、なぜか彼は自身を殺すことを勧めてきた。

「……なんでそう思うわけ?」

「なんでって、僕を殺した方が楽だと思うから。ふぬけ……? っていうのはよくわからないけど、付き合ってふぬけにするより殺した方が時間はかからなくて楽じゃ無いかなあ……って思ってた。だってナイフで一刺しするだけでしょ?」

「……なんですって」

「って、そっか。そうすると殺人罪で捕まるのか。それじゃ本末転倒だ。でもそうすると僕が自殺するのが一番楽だね」

「……………ちよ、と」

「でも困った……、僕も自殺は避けたいんだよね。『家族の教育のせいで自殺した』とか言われるのは姉さんの進路にも響きそうだし、なによりもし自殺に失敗したら僕のお医者さんへの道が途切れちゃう……」

「……………」

「でも付き合うにしても、年頃の女の子が好きでも無い人と付き合うって言うのは個人的にも気が引けるし。君もお兄さんを差し置いて僕に時間を割くのは嫌でしょ？ むずかしいね……」

真剣に答えているようでいて、まるで他人事のような話しぶりに萌奈は絶句した。

自分も人のことは言えないが明らかに常人の考え方や無く、何処かずれている。自分が死ぬことを軽く受け止め、当事者では無く第三者の如く話してくる。まるで「自分はそのゲームの駒」とでも言わんばかり。

——その彼の姿は……とても生きているとは言えず、まるで何かに動かされているマリオネットの人形だ。

「ねえ、何も感じないわけ？」

「……………??？」

「もし死んだら、お前はもう家族とも大切な人とも会えなくなるんだよ？　なんでそんな簡単に命捨てられるわけ？」

「そ、そんなこと言われても……………」

「わたしが言うのも変だけどき、死んじやったら医者になるって夢も叶えられなくなるんだよ？」

次に口を開いたとき、萌奈は兄思いの妹では無く…………彼の友達として口を開いていた。

「うーん…………別に医者になるのは夢でも何でも無いからなあ……………」

「…………なんですって？」

「なんというか、母親に言われてるからやってるってだけ？　やりたくてやってるわけじゃ無いから……………」

「じゃあなつきくんの趣味は？　やりたいことは？　生きてそれをもっとやりたいとは思わないの？」

「ううん？　趣味昔はあったけど今は母親に言われてやめてるし、それにやりたいこと



かあ……。あれ、なんでかな……。【一つも思いつかない】  
「——ッ」

「まあ、勉強以外はあんまり考えたこと無かったからね。あ、ホントだ僕ガリ勉強」

ほわほわと言うなつきに、萌奈はまるで苦虫でも噛みつぶした酔うな表情をする。

「萌奈さん？　なんでそんな表情するの？」

「……………あーあ、わかつちやった。君がガリ勉強理由」

「？」

「すこし可笑しいと思ったんだ。なつきくんが勉強以外の事してるのを見たことが無かったの」

萌奈は顔を手で覆い、ギリツと歯を鳴らした。

少し話ただけでわかる……。彼の親は【毒親】だ。

恐らく休憩中ずつと勉強をやっていたのも、陰キャのようにいつも席に座り、遊んでいる姿を一度も見ることが無いのも。

——年頃の男子としての遊び方に話し方、ゲームや漫画などの娯楽。それら勉強以外の全てを親によって押しつぶされて生きてきたのだ。

萌奈は突如、なつきの手を取った。

「……？」

「ゲーセン行くよっ！ 今からふぬけにしてやるっ！」

「げ、ゲーセンって何処？ っていうかまだ授業……」

「サボれば良いのっ！ わたしもサボるからっ！」

萌奈はそう叫び、彼の手を引っ張った。

妹としての感情じゃ無い、人間として彼の危うさを第六感で感じ取った。

——このままの彼では危険だと。

——

「ゲーセンってゲームセンターの事だったんだ」

中学校を強引に早退し、なつきが連れ去られた場所はデパートの中ある普通のゲームセンターだった。

二人はある程度ゲームセンターで楽しんだ後、夕方の道を歩いていた。

「どう、楽しかった?」

「……よくわからない、けどよかったの? こんなバチなんてもらって」

「いいのいいのっ、マイバチにしようとして飽きた奴だから」

「ふうん……ってというか今更だけど早退してゲームセンターに行く、これって良いのかな?」

「こういうのを【青春】っていうんだよ、なつきくんはわかんないと思うけど」

「うん、わかんない」

そんな事を話ながらも、二人は共に歩く。

彼のゲームセンターに入った時の反応はひどい物だった。まるで子供のようにそわそわして、気になった物は片っ端から指を指し、あの太鼓のゲームですらやり方を知らず、手で叩くレベル。

——仕方ないのであろうが、これでは子供と大差ない。

そんな事を考えていると、なつきはあーつと口を大きく開けて見せた。

「……なに？」

「そういえばふぬけにするんでしょ？ ほら」

「なんで口を開けるわけ？」

「ん」

なつきはポケットからスマホを取り出し、萌奈に見せた。

そこにはネットが表示されており、

ふぬけとは——はらわたを抜き取られたような状態である。  
と書かれていた。

「あ——っ」

「それは物のたとえだから、本当に取るわけじゃ無いから」

「ふうん、そっか」

しかもこれである。

勉強は一級品なのだが所々常識が欠如している。人と話さず、文字だけで理解しようとしていた証拠だ。

「さて、最後のしめといこつか」

そう言って、萌奈はポケットから四角い箱のような物を取り出し、とんとん……とその中身を出す。

「……たばこ？」

それは……明らかに未成年が持つてはいけない物、たばこであった。

「はい、一本あげる」

「え、いやだめだよ。僕ら未成年だよ？ それに身体にも悪いし」

「ふうん。常人の如く百害あって一利なしとも言おう気？」

「ま、まあ……」

当たり前のように断るなつきに、萌奈はため息をつき、差し出していたたばこを啜え

る。

「そういう奴いるけどさ、むしろ本当に利点がある物なんてこの世の中にはなつつうの。身体に悪いというのなら……何故そいつらは本来は呑む必要の無い、依存のリスクがある酒を飲む？ 他人にも迷惑というなら……何故そいつらはそいつらの言う『他人』の気持ちを考えてたばこを吸っているとと言うだけで軽蔑し、罵倒する？ そういう奴らは結局偽善者ぶりだけ、それかたばこが嫌いな奴の過剰反応」

「そ、そんな極論な……」

「あのさ、いい加減『悪い子』になれつての」

そう言って、萌奈はたばこをもう一本差し出した。

「遊んでるときさ、ずっとそわそわしてたよね？ どうせ『こんなことしてて良いのか？』とか『勉強しなきゃ』とか色々考えてたんでしょ？」

「……………」

「今までの人生でなつきくんに何があつたかは知らないし、聞く必要も無いけどさ、君いくらなんでも良い子すぎなんだよ」

萌奈はそう言って、自分の加えているたばこに火をつけ、先端を赤くした後煙の息を吐いた。

「色々考えるのはわかるけどさ、もう学校サボってゲーセンに来るなんて『悪い子』になっただから。今は良い子でいる必要なんてない。悪い子でも良いんだよ」

「悪い子でも、いい……？」

「そう、無理に頑張る必要なんて無い。勿論たばこは身体に悪いから、強制はしない。でも少なくともわたしは悪い子として遊んだ最後にたばこを吸って……『たばこを吸ったからもう後戻りは出来ない』って良い子の自分と決別してる」

「良い子の自分と、決別……」

「中途半端に悪い子になっちゃだめ、心を休めてるはずなのに、その心労で心が辛くなる」

「……………っ」

「わたしに悪い遊び教えられたって思っても良い、後で先生に言いつけてもいい。だって全部わたしが悪いんだから、だってたばこを勧めたのもゲーセンに連れてきたのもわたしでわたしが悪いんだから。頑張り屋さんな君はなにも悪くないでしょ？ だから

「俯くなつきに、萌奈は優しく言った。」

「今だけは……悪い子でも良いんだよ？」



## 傍観者のセカイ 二

?

【キーンコンカンコンコン】

「ふあ……ああ……」

ようやく授業終わりだ。

なつきはようやく終わったと疲れて欠伸をした。

「やつほーっ」

「ニュー……」

その瞬間、なつきの後ろから何かが降ってきた。

そう、萌奈だ。彼女は欠伸をした瞬間に後ろから抱きしめてきた。

「ねーねー、今日遊びにいこ？ あのゲーセンまでっ」

「また？ やだよ。今日が行かない」

「えー、また医者勉強？ そろそろ完全に悪い子になりなよ」

「ならない、あと勉強のために行かないんじゃないよ」

「え、じゃあなにさ」

「君と遊ぶのがめんどいから行かないだけ」

「むきいいいいいい——ッ！」

なつきが二年生になった頃、二人は学校内で『仲良し二人組』として同級生に知られていた。

元々勉強勉強で、話ずらそうに見えた彼だが……最近萌奈が話していることもあり、学校の仲間とも打ち解けてきた。

「そんなことより、萌奈？」

「ん」

「今日返却の数学、何点だった？」

「……………」

「……………」

「……………」

萌奈は長い沈黙の後、にぱーっと良い笑顔で答えた。

「62点だお♪」

「萌奈？」

「はい」

なつきが笑顔になり萌奈が危険だと察知した瞬間、萌奈はその場に犬のようにぺたりと座った。

「君言ったね？ 僕をふぬけにするって」

「ハイ」

「そして、お兄ちゃんに褒めてもらうって言ってたね？」

「ハイ」

「勿論、それはとっても良いこと。誰だって褒められたいもんね？」「ハイ」

「でも、君がふぬけになっちゃだめだよね？」

「ハイ」

萌奈がなつきに怒られている。

すでにその光景はこのクラスでテストが返却されたときやその他萌奈がふざけたときなど、恒例行事となっていた。

クラスメートは苦笑いでそれを見つめる。

「いい？ 僕がどれだけ君にメロメロになってふぬけになっても。君ががんばんなきゃ意味が無いんだよ？」

「ハイ」

「勿論62点は赤点じゃないし、萌奈もいっぱい頑張ったと思う。とつても偉いと思うよっ。」

「ハイ」

「けど、もうちょつとだけがんばろ？ 君にとつてはお兄さんの事以外はどうでも良いかもしれないけど、もつとがんばったらもつと褒めてくれ——」

「ハイ」

「……………ハイって言うておけば話が終わると思ってる？」

「ハイ」

——パシンッ!!!

その刹那、クラス中にハリセンの音が響き渡る。

「はにゃああ……」

ハリセンに当たった衝撃で萌奈は身体を左右にだるまの如く揺れた。

「良い？ 良く聞いて。そもそも君はお兄さんに褒められたいんでしょ？ お兄さんの役に立ちたいんでしょ？ なら頑張らなきゃだめだよ？」

「シズクサンカワイイヤッター」

「そもそもさ、ちゃんと目的があるって素敵なことなんだよ？ 愛する人の為に頑張ろうとするって素敵だよ？ 僕にはそんなのないもん。とつても萌奈は偉いんだよ？ けどね……」

「ハ、ハルカチャンノネコミミー!?!」

「……さつきから聞いている？」

「はあああああああああ  
!?!?!?」

なつきがそう問いかけた瞬間、萌奈は怒りで大声を張り上げた。

「なんで杏たんはヤンデレじゃないわけ!?! 処女作だからってふざけやがって! 杏たんもヤンデレにしろ! アンズタンヲヤンデレニシロー・アンズタンヲヤンデレニシロー・アンズタンヲヤンデレニシロー」

「……………」

そのなつきが冷たい目で見つめたその姿は、明らかにスマホを持っていてこちらのお話を聞いてなかった。

「……………何見てんの?」

「プ〇セカのヤンデレ小説やたら少くない?」

「別に題名聞いている訳じゃない。あと許可取ってないから題名出さないで、怒られるから」

そう言って、なつきはため息をついた。

「小説は後でも見れるでしょ?」

「だって、今度の更新は多分みのりたんか愛莉たんなんよ? 早くみたいもん」

「……………」

「愛莉たんがツンデレながらも無自覚ヤンデレで、雫さんのテクニクに動揺しながらも頑張ってるの早く見たいもん。あとみのりたんがあんなキラキラオメメのはわわキャラでヤンデレたら……最高です」

「……………」

「コラボ誘おつ、「ニー〇キャラのヤンデレやるので一緒にかきませんか」——と」

「萌奈?」

このような感じで、この頃のなつきは無理に医者に囚われることなく、普通の学生として暮らしていた。

---

そして、学校終わりのある日……、

「とういわけで、小説ランキング入りおめでとう！ カンパーイ」  
「かんぱい」

二人はファミレスで窓から覗く夕焼けを見ながら、ジュースの入っているコップを打ち鳴らした。

「いんやー、書いていた当初はまさかランキング入りまでするとは思ってもみなかった。全部なつき君のおかげだよ」

「僕は君の書いた小説を校正して推敲しただけ、ほとんど何もしてないよ」

「コウセイ……スイコウ……？ なにそれ」

「別に知らなくて良いよ」

頭の上にハテナマークを浮かべている萌奈にそういった後、ジュースで唇を湿らせた。

今現在、萌奈は兄を主人公にした小説を書いており、兄の素晴らしさを淡々とえがいている。



しかし、小説家を目指していた口のなつきからしてみれば明らかに荒い文章だったため、手伝ってあげているのだ。

「それで、最近はどうよ？ 毒親家族問題は？」

「あー、それねー。まあぼちぼちやってる。基本的には良い両親だしね」

「……わたしが見た限りでは、とてもそうは見えなかつたけど？」

「他人からはそう見えるだけ、暴力とかは振るわないし僕と姉様の未来の事をいっつも考えてくれる」

「それは洗脳され、将来を操られてるだけだよ、それによって前までやりたいことできてなかつたじゃん」

「そうだねえ……そうかも知れない」

なつきはそう言つて、背もたれにぐてーつともたれかかった。

「確かに、子供の未来は子供の物……そういうのを良く聞くね」

「だつたら……」

「でも、それじゃあだめ」

なつきは彼女の唇に人差し指をぴとっと置いた。

「毒親が支配しているように見えるのは、それは優しいからだと思っ」

「……………」

「子供が変な道に行つて、嫌な目に遭つてほしくない。束縛の理由はそれだけだと思っ」  
そういつて、なつきは優しい笑みを浮かべた。

「子供よりも生きて世の中の理不尽を知つて、人の内面の恐ろしさも生きてきた中で知つている両親だからこそ。痛い思いをして産んで愛した自分の子供を……………過剰なまでに守ろうとしちゃうだけだよ」

「……………なつきくんは、そう思つてる……………そう思おうとしてるの?」

「そうだね、そう思いたいだけ。でも僕は……………最初から両親を毒親だと切り捨てて罵倒なんてしたくない。それだけ」

「……………あそ」

なつきのその言葉に、萌奈はため息をつく。

その親のせいで味覚障害までストレス度合いが進行していると言うのに、まだそんなことをのたうち回るか。

「そんなことよりさあ、また姉様が一緒にお風呂入ろうって言い始めたの」

「そっか」

「確かに僕は怒ったよ？ 『弟にまで虚無の顔貼り付けんな』って。でもさ、隠してた感情がブラコン気質なのは予想できない。最近是一緒に寝るようになってんだよ？ 可笑しくない？」

「はいはい、そうだね」

「まあそれが、姉様のやりたいことなら僕は別に良いんだけどさ。もうちょつと抑えてくれない物かなあ」

「ねー」

まあ、今はそれでいいか。

幸い、聞いての通り最近姉の方と随分仲が良いようだし、これ以上の詮索は無粋であろう。

「めんどくさいから別居考えようかな。零花姉あたりに交渉して一日だけでも……」

「ん？ だれそれ」

「……………幼馴染みのもう一人の姉」

「幼馴染みのお姉さん……あ、なるほど！ いわゆる初こーっ」

「だまって」

それに、今の彼には毒親に忙殺される事は無く、自分の意思で行動を出来るようになり始めている。

——大丈夫のはずだ。

——  
——  
——  
そんな風に思っていたある日の事だ。

「まじ？ なつきって親にそんな束縛されてんの？」

「マジさいてーじゃん」

「ははっ、そうだね」

クラス内での雑談の最中に親への愚痴合戦になり、それになつきも参加していたときの話だった。

「ほんと、いつも大変だよ。医者になるんだよね？　医者になるんだよね？　つて。好きでなるわけじゃないっての」

「ははっ、マジうける〜」

「大変そうだね……」

いつもと変わらない休憩中に響く、クラス少年少女の笑い声。そんな何でもない日に……事件は起こった。

「ほんと、そんな親と一緒にいたら気が滅入るでしょ？　いやだよねー自分のことしか考えてない屑親って」

「あ……、うん。そうだ、ね」

「なつきくんはこんなに頑張り屋さんなのにさ、明らかに毒親が邪魔している感じ？　ほんっと今すぐ死に絶えてほしい」

「……………」

それは、なつきの話になった途端なつきの母親への非難が多くなったからだ。

勿論、なつきの母親のことを考えれば、それは普通の反応。当然の非難と言えよう。

「そもそもさ、毒親は子供の気持ちをくめつて話だよ、親が自分の物だと勘違いして  
「さ」

「……………」

「そういう人はホントに地獄を見てほしい、現になつきくんがこんなに嫌な思いしてる  
んだもん」

「そーそー、明らかに誰にでも嫌われるタイプだよな」

しかし、それをその当人の目の前……なつきの目の前で話すのはあまりにバカ。

「……………」

萌奈はすぐに嫌な予感を察知し、椅子から立ち上がる。

毒親の子供が愚痴を言うのと、他人の人間が毒親だと非難し罵声を浴びせるのは訳が違ふ。

毒親だろうと何だろうと、その親は彼にとつては大切な家族。それを他人が非難して良い理由など何処にもないのだ。

「ほんつと屑！ 今すぐ死ねつつてね！」

「ほんとそれ！ この世の地獄を全て受けろつて感じ？」

「本人のなつきもそう思うでしょ？」

「……………」

そして、他人がそうなった場合罵倒には限度がない。

その親のことを全く知らなくても、毒親というだけで嫌な想像を膨らませ、意味もなくその当人に向かって……………それか陰で正義面をするのだ。

「そんなんだつたらお姉さんもヤバそう」

「あー、あの人？ 確かに優等生すぎて正直やばいよね」

「多分毒親に完全に手なずけられてんでしょ？ 優等生の皮を被ったキチガイつて感じ

「？」

それはその子の為に意図を組み、君の仲間だと安心させるためでは断じてない。

——ただ罵倒をしたいだけ、自分の事ではないと非現実なことだと高をくくり、自分は正しいと主張したいだけの偽善正義主義者だ。



## 傍観者のセカイ 参 【コラボ ただの凡人様】

?

「……んう」

今日は休日で学校はない。

なのでなつきは勉強をしていたのだが、なんとなくやる気が起きなかつたため公園に来ていた。

「……やり辛い」

しかし、来たは良い物の勉強道具は風にあおられ、そして公共の場のため視線が気になるど散々で、既に帰ろうとしていた。

——その時、

「こんにちは、なつきくん」

「……………う？」

「久しぶりね」

そんななつきに話しかけてくる珍しい珍客がいた。  
優しい瞳に長い髪……………確か姉の知り合いである雫さん。

「……………あ、どうも」

「知り合いか？」

「ええ、同じ部活の子の弟さんなの」

「姉がお世話になってます」

そう言って、なつきは首だけでぺこりと頭を下げる。

そんな雫の隣にいるのは、どこか気の抜けたような男性。多分彼氏と言った所であろう。

「ところで、そちらの方は……………？」

「彼氏です♪」

「違います」

その言葉に、一瞬周りがどよめいた。

まあ、否定が妙に早かったし、腕も組んでいるので彼氏で間違いなさそうだ。

「初めまして、朝比奈なつきといます」

「わたしは左てる、よろしくね、なつきくん」

「ねえ、なつきくん。せっかくだから一緒に出かけしない？」

雫のその提案に、なつきはくすりと笑った。

「ふふつ、自分がデートについていくほど野暮な人間に見えますか？」

なつきはそう言った後、再度勉強道具に視線を戻す。

その勉強道具は山のように積まれており、だからこそ視線を集めてしまっていた。

「その本は……」

「別に、ただの参考資料です」

そんな疑問を問いかけてくる左に、なつきは淡々とそういった。

「医者……夢なの？」

「夢ではないです、なります」

彼の問いに、なつきは迷うことなく断言した。

「なりますって……もしかして君、本当は医者じゃないものに——」

左がそう心配そうに問いかけた瞬間、なつきは左の唇に人差し指を当てて笑う。

「左さん、でしたっけ？ 彼女を差し置いて、別の人と会話の花を咲かせるのは、ナンセンスですよ？」

これ以上の会話はなつきの性的にもナンセンスだ。

わざわざ勉強の気分を変えるために来たのに……誰かと長々話をして疲れたら本末転倒だ。

「……………」

「それじゃ、僕は場所を移すので、楽しんで」

□ □ □

そして、左と初めて出会ったその数日後の話。

——ピンポン。

「んあ?」

家族が全員出払っており、なつきだけが留守番をしているそんな時、突如家のインナーホンが鳴り響く。

なつきは顔を少し引き締め、早足で玄関まで向かう。

ガチャ、

「はーい」

「よっ、なつきくん、元気してる?」

「貴方は……」

そこには、先日公園で知り合った少年、左の姿があつた。

「こないだの事で、もう一度君と話をさせてほしい」

「お話、ですか? わかりました左さん。何も無い所ですが入ってください」

この間の話——とはよくわからなかったが、なんとなく目的はわかるため、とりあえず家に招き入れた。

「つまらない物しか用意できませんでしたが、どうぞ  
「ありがとう」

左は出されたお茶を一口飲む。

そして、リビングには沈黙が包まれた。

「……それで、話とは？」

「君の……本当のやりたいことについて——」

と、左がそう言い切る前に、なつきも席に座るとため息をつく。

「あ、そういうのいいんで。ねえ、悪いことはやめましょう？」

「？ 何の話かな？」

よくわからないと言った様子で目を丸くする左。

「だって、貴方には彼女さんいるんですよ？ いやあの、悪いことは言わないのでやめませんか？ そもそも姉様、そんなに優良物件じゃないですよ？」

「……………」

彼の魂胆はわかっている。

どうせ雫さんからなつきが『あの優等生まふゆの弟』だと聞きつけて、とりあえず弟の方とお近づきになろうという策略だ。

たまにいますのだそという人。

「……なつきくん、私は今四人の女性に——主に性的な意味で迫られている。そんな状況で君のお姉さんに手を出せる訳がないだろう」

「あ……（察し）」

その瞬間、窓の外からものすごい視線を感じた。

どうやらそんなつもりは微塵も無かったらしい、しかしなつきがそんなことを言ったせいで外から殺意のような視線を感じ始めた。

——あ、この人の彼女ヤンデレなのか……。

「え、えと……話題を変えましょう！」

なんとも言えない命の危険を感じ、なつきは強引に自分で話題を振った発言をかき消した。



「今回のご用件は？」

「……すまない、君に今日話に来たのは、君の……君自身の事についての話をしに来た」  
「僕の？」

予想していなかった彼の要件に、なつきは目を丸くする。

「あの時と同じ質問をしよう……君、医者になりたいの？」

「……この間も言いましたが、なりたい。ではなく『なる』です。これでも頑張ってるんですよ」

なつきは自分の力を誇るように、腕を捲つて虚しい筋肉を見せた。

「それは重々承知している、失礼な質問をしてすまない」

「……………」

「だがな、君が医者について話している時、君はとても悲しい目をしているんだ。まるでやりたくないことをやらされてる時の、気だるげな人間のような」

「あー、なるほど。そういうね……」

——なんだ、そういうタイプの人間か。

なつきは何かを理解したように、何処か苦笑を浮かべる。

「お気遣いありがとうございます、まああの時は確かに疲れて目が虚ろだったかもです。あの時は気分転換に外でやろうとしたんですけど……これが視線が辛いわ風が邪魔だわで——」

そのようになつきは話を続ける。

まるでその話題を避けるかのように。

「……やはりだ」

「何がです？」

「君はこちらが確証に迫ろうとした時、逃げるかのように話を反らす。まるで触れられたくないように」

「……………」

しかし、その意図は明らかに気付かれてしまったようだ。  
なつきは観念したかのようにため息をつく。

「はい、触れてほしくありません。なのでやめてください」

「それはできない。俺は困っている奴は放っておけないからだ」  
「さいですか」

それを聞くと、なつきはにっこりとやさしい笑みを見せる。

この手の人間にはこうやって適当に笑顔を振りまき、適度なところで怒って……そのあとそれっぽいこと言えば大体満足する。

「君は……医者になる事を誰かに強制されてるんじゃないか？」  
「……っ」

「凶星だな」

「っ、人の神経を逆なでするような事が得意な人ですね」

この手のタイプは怒った後に適当な本音をぶつけければ『心を開いてくれた』と勝手に満足する物だ。

そう思い、なつきが怒りを出したその時、

——がらがらっ、

と、誰かが玄関から入ってきて、ここに顔を出した。

「あ、母さん……」

それは、なつき実の母親だった。

「あら、お友達？」

「……別に」

「あら……、初めまして、わたしなつきの母です」

「——っ!？」

「……どうかしましたか？」

「……いえ、初めまして、左てるです」

左はなにかを感じたようだったが、それ以上に反応を示すわけでもなく挨拶を返した。

「ごめんなさいね？ 今日ちよつとこの子機嫌が悪いみたい。いつもは優しい子だから許してあげてね」

「はい」

「あ、なつき。お母さんね、なつきの良さそうな高校のパンフレットもらってきたの」  
「……………」

そういうと、母親はパンフレットを五枚ほど差し出してきた。

「どれも有名なお医者さんが卒業している学校ばかりよ？」

「うん……………」

「こういう所に行けば、ちよつとでもなつきがお医者さんになるための手助けになると思うの」

「うー、ん？」

「お医者さんになりたいのよね？ お母さん応援してるからっ」

母親の言葉に、なつきは腕を組んで悩んだ。

——ぶっちゃけ高校は何処でも良いんだよなあ……。

自分の為に考えてくれるのはありがたいが、正直何処の高校に入ってもそこまで医者になる難易度は変わらない。

……学歴マウント取りたいわけじゃないし、進路どうしよう？

それゆえ、なつきは母親にそう言われて初めて初めて進路について悩んだのであった。

「……………」

「？」

怒る演技を忘れ、母親のパンフレットを凝視していると、左の瞳が何処か鋭くなるのを感じた。

「……………すいませんが、息子さんは、いつ頃から医者になりたいと仰るようになったのですか？」

「いつから？ うーん、小学校高学年くらいから……………かしら、わたしがお医者さんに勧め

てそれからだったはず、ね？」

「この人には関係ない」

そこまで詮索されたくないと言わんばかりに、なつきは声を尖らせた。

「なつき、何があったか知らないけど人様にそんな態度取らないの」

怒られた。

「やっぱり……な」

「やっぱり？」

「なつきくんが医者になりたいと話するとき……とても寂しそうな目をするんですよ」  
「……………」

その左の言葉に、母親は黙り込む。

「違う、違うよ。そんなわけ……」

「小説家……なつきくんのなりたいたいもの」  
「っ」

なつきはすぐさま否定しようとしたが、左のまるでなつきの確信をつくような言葉に、つい言葉を詰まらせた。

「……どこからその話を」

「予想だよ……君の過去を、君のお姉さんから聞かせてもらった。そこから予想した」  
「違う、僕は……医者に……」

「無理はしちやだめよ、なつきくん」

そんな時、この家に入ってくる者がいた。それは……まふゆの親友である雫だった。

「なつきくんが頑張る気持ち、すっごくわかる。でも、嫌な物を頑張っても、嫌な物は嫌なの。なりたくなかったの？ 小説家」

「ち、違う……いやなんかじゃ……」

「いい加減にしてください。これ以上この子を追い詰めないで」



なつきが否定しようとしたその時、母親がなつきをかばうように立ち塞がる。そんな母親に、左は首を横に振る。

「追い詰めてたのは……お母さん。アンタの方なんじゃないのか？」

「……っ!？」

「医者になってほしいと……子供の気持ちを蔑ろにし、自分の気持ちだけを押しつけたあんたの責任……違うか？」

「」

その言葉で、なつきは完全に理解した。

——こいつらは、敵だ。

「……………」

その後、二人は色々話したら満足して帰ってくれた。  
なつきはコップを洗って、冷たい瞳をする。

「とんだ茶番だ……くそっ」

先ほどまでは演技の怒りだったが……なつきは未だ、怒りを隠せずにいた。

「結局いつもと同じだ、それっぽい本音言ったら出て行きやがった」

いつもそうだ。

なつきを助けたいと望む偽善者のほとんどは母親を毒親だと、敵と認識し……その呪縛を解く！ そんな奴らばかり。

そして言うのだ、自分のやりたいことをやれと。

「……ちっ」

そいつらは基本自分が正義だと……なつきを不幸だと思い込み他人のくせに口を出し。

それっぽい御託を並べれば、その状況が一切解決していなくとも『これで解決！』と満足する。

——結局、『毒親という悪役を作り偽善者面したいだけ』

「ふざけるな」

「毒親に育った者の表面上しか捉えず、親が悪いと断罪し……自分が救ってやると無駄な正義感を持つ。」

「クソの他人が……母親を毒親だと貶しておいて、『お前はレールの上を走ってるだけだど?』」

たとえあいつらが正しかったとしても、

大切な家族を貶されてまでお前らを信じるバカが……どこにいる。

——自分が決められたレールを走るだけの……意思を出せない人間なのだとしたら。やつらは無差別にレールを破壊し、レールの先……未来を踏みにじるクソだ。なつきは、つい手に力が入り、コップを割った。

「……なつき」

「あ、あつ!」

母親のその悲しげな声で自分がコップを割っている事に気付き、なつきは慌てる。

「ご、ごめんっ！ 割れちゃった！」

「なつき、なつきのやりたい事って……医者なのよね」

「……………」

その悲しげな母親を見て、なつきは唇をかんだ。

アンタもか……アンタでさえ医者を嫌々目指しているのが可笑しいと思うのか。

「違う、僕のやりたいことは小説家」

「……そう、そう感じるようになったのね」

「……………」

「医者を目指すのに疲れちゃったのね、頑張ってたもの。医者以外に目が向くのは仕方ないわよね」

「ちがう、ぜんっぜん違う!!!」

母親のその言葉に、なつきは大声を上げる。

「『やりたいこと』と『やるべき事』は違う！ 確かに僕は小説家を目指したいよ、医者以外にも目を向けてみたいよ」

「……………」

「けど、それじゃあ幸せになれない」

なつきはそう言って俯いた。

「やりたいことはただの理想像、僕のやるべき事は医者になって家族と幸せになること。それ以外なんてない」

「……………」

「やりたいことを勉強より優先してやる？ 明らかに愚策。医者になる人にはお金に目が眩んだ人や本当に医者になって人を助けたい人……色々いるんだよ？」

なつきのその顔は、何処か悲しそうで辛そうで、しかし何処か真の通った瞳だった。

「そんな人たちと争うのに、やりたいことをやる暇なんてあるわけない、頑張つて医者になろうとしてる人への冒読だよ……………」

「……なつき」

「やりたいことをやって成功できる人は本当に一握り。僕は不器用さからそれにはなれない。ねえ、そんなに可笑しい？ お母さんが進めてくれた医者になろうとして苦しんでる。そんなの当たり前じゃん……人の命を扱う仕事なんだから」

「……………」

「やりたいことをやれ？ 嫌なことは嫌といえ？ それは現実から目を背けてるだけ……。そんな道理が通つたら、やりたくない勉強をやらなくても幸せになる……頑張つた人が不幸になる世の中になる！」

そして、なつきは声を張り上げて泣いた。

「なんでやりたいことを出来る人の方が幸せだとみんな思い込むの!? どいつもこいつもっ！ 他人のくせに上から目線で指図して！ 苦しんで頑張つてる僕が可笑しいみたい……っ、勧めてくれたお母さんが悪者みたい……っ！ 何で何で何で何で

——ツ!!!」

泣きじやくるなつきを、優しく母親は抱きしめた。

彼だって幸せになりたい、やりたいこともあるし目指していた物もある。

しかし——、それを捨ててでも手に入れた未来……やるべき事があるのだ。

僕はただ……家族みんなで幸せになりたいだけなのに。



## 傍観者のセカイ 四 【コラボ YM\*y m様】

?

「ふう」

休日の昼下がりに、なつきはいつも通りバイトの店でスイーツを作っていた。今日は特に人も多くなく、平和その物だ。

「やつほー、弟くん」

と、さつきまでは思っていた、その可愛らし声が店中に轟くまでは。

「……皆さんまた来たんですね。まあ良いですけど」

なつきはため息をつきながらも、目の前の客人をみる。

いつの間にか、彼女達ニーゴの集合場所がここに確定したらしく、最近はよく店で見かける。

しかし、彼女達の方に目をやると、そこには珍しい客もいた。

「……あれ、零花姉さん？」

それは、まふゆとなつきの幼なじみでありもう一人の姉貴分……そして同じく医者を目指している少女——零花出会った。

「久しぶり、なつきくん。あ、バイトしてたんだね！ 偉いなあ」

と、相変わらず笑顔で接してくるが、まふゆ達はその零花にぎよつとした目を向けた。

「れ、零花？ いつもと雰囲気ちがくない？」

「学校ではいつもこんな感じ」

恐る恐ると言った様子で訪ねてくる瑞希に、まふゆは淡々と答える。  
すると、動揺している三人を見た後、零花は大きいため息をつく。

「……はあ、なつきくんとは素で話したこと無かったのに」

まるで今まではポーカーフェイスだったかのように、零花の顔が圧倒的無になる。

「あー……、零花姉さんもそういう感じなのね」

そんな見慣れない幼馴染みの姿に、なつきはつい苦笑を浮かべた。

——元々作り笑顔っぽく、いつか本当の顔を見たいな……とは思っていたが、こんなにあっさり、しかもここまで無表情だとは。

とはいえ、姉のまふゆがいつもこんな感じなので、あまり驚きはしなかった。

「それにしても珍しいね、零花姉さんが人とつるんでるなんて」

「無理矢理、つるまされてるだけ。それに学校に友達はたくさんいる」

「どうせ嘘つきの友達ー、とか言うんでしょ？」

なつきの疑問に答える零花に、絵名は冷たい目でそうツッコんだ。

どうやら、零花と絵名の仲はあまり良くないらしい。

「け、喧嘩はやめようよ……なつきくんの前なんだから」

そして、喧嘩しかけた二人を止めるかのように奏が仲裁に入る。

（零花姉さん、友達いるのか……大変そうだな）

零花の話を聞いて、なつきはそんな事を思った。

なつきにとつて友達など不要な物、互いに遊びへと誘惑して仲良しごっここの害悪だとすら思っている。

——そんなんで、医者になんてなれるのかな……。

「……とりあえず、スイーツ用意してきますね」

そんな邪推な考えを巡らせたが、すぐに『仕事中』だと隅に置き、スイーツ作りに取りかかった。

「と言うわけで、今回もお疲れ！ かんぱーい」

「「乾杯」」

瑞希のその元気な声の音頭に乗るように、五人は互いのコップを打ち鳴らした。  
一口飲むと、すぐさま瑞希が質問を投げかける。

「そういえば、零花と弟君は面識ある感じ？」

「ある、まふゆと幼馴染みだから」

「あー、そういえばそうか」

素っ気なつく返す零花に、瑞希は納得したように頷いた。

（個人的には零花姉さんと貴方達がつるんでる方がいがないんだけどなあ）

「つていうか、アンタとなつき君が幼馴染みって大丈夫？ なんか心配だわ」

なつきがそう考えているのを余所に、絵名がそんな失礼な事を言ってきた。

その瞬間、零花が眉をぴくりと動かす。

「それはどういう意味、絵名」

「言葉通りの意味よ、アンタと幼馴染みだどこの子の教育に悪そうねって思っただけ」

「ブーメラン」

「何ですって!?! わたしの何処が教育に悪いつて言うのよ!」

「ま、まあまあ。やめようよ」

奏が落ち着かせながらもデットヒートが止まらない二人を見て、なつきは首を傾げた。

（零花姉さん、楽しそうだな）

なんとなく、本当になんとなくだが、なつきは今の状況にそういう気持ちを持った。

元々彼女は大切な幼馴染みであったが、それと同時に危うさを持った人間であると言うことは医学を学び始めたときから思っていた。

今まで零花という幼馴染みは本当のお姉さんのように優しく、優しい笑顔を振りまく

女性だった。

しかしそれと同時に彼女の行動の一つ一つにはストレスのような物が見受けられ、その笑顔が本物だと思えなくなった。

まるでまふゆと同じ、張り付いている笑顔のような。

——幼馴染みである零花の精神的回復。

彼女こそ……母親の意向とは関係なく、なつきが医者を目指す理由の根源になった人物だ。

「そーだ！ 弟君、仕事の区切りがいたら後で来て！ 僕達それまで待つてるから

さ」

と、突如理由もなしにそんな事を言ってくる瑞希になつきは首を傾げた。

「わかりましたけど、なぜ？」

「いいからいいから！ ほら店長さん呼んでるよ？」

なつきは首を傾げながらも、とりあえず店長のいる厨房へと戻っていった。

ギャーギャーわーぎゃーっ！

「……………うっさ」

厨房で仕事をしていると、すぐさま騒ぎ声がこの店を響き渡らせた。

「……………少し目を離れたらいつもこれ、零花姉さんやりづらいだろうな」

無理に一緒にいるのだったら最悪あの四人から幼馴染みを男という力で引き剥がすか。

そんな事を考えながら、四人の元に戻ると、案の定と言うべきか……………やはり騒いでいるのは彼女達だった。

「また騒いで……………今度は何ですか」



「零花がねーっ！ みんなで楽しむ時間なんて価値がないっていうんだよー」  
「そこまではいつてない」

大げさに言う瑞希に訂正をする零花。

「え、えとね。皆でデパートに行こうって事になって、それで……」

「はあ、なるほど」

「奏は瑞希のあまりに極端な説明を訂正しつつ、簡単に先ほどまでの出来事を話してくれた。」

（ようするに、瑞希さんは遊びに行きたくて。零花姉さんは勉強をしたい、か）

事の顛末を知ったなつきは一瞬だけ考え込む。

本来だったら、遊んだ方が良い、とかずっと勉強だと気が滅入る、など温かい幼馴染みらしい言葉をかけるべき。

なのだが、

「零花姉さんの言うとおりでですよ、他人と楽しむ時間に基本的に価値なんてありません」  
「「「え」」」

残念ながら、彼は零花の言葉を全肯定した。

突然のなつきらしからぬ発言に、五人は動揺のあまり変な声を漏らした。

「ど、どうしたのよ!? なつきくんらしくないじゃない!」

「そうだよ!? 弟くんそんなキャラじゃ無いよね!」

「いや、お二人のイメージは知りませんが」

「やっぱり零花は教育に良くなかったのよ!」

と、妙なイメージを持っている瑞希と絵名を無視し、なつきは幼馴染みである零花に目を向けた。

「零花姉さん、僕はあなたの言うこと正しいと思います」

遊ぶのは時間の無駄、そんなことはなつきも理解している。

理由は明白、『萌奈という彼女との遊びには一切合理性が無かったから』だ。

自分の彼女になってくれた萌奈はいつも自分と遊んでくれたが、それは医者になる為には不必要な物ばかり。

明らかに時間の無駄だった。

「……けど、僕はそれでもお出かけすることをおすすめします」

「なんで」

零花は不思議そうな顔でなつきを見る。

「部屋にこもりつきりじや、勉強なんて上手くいきませんからね。気分転換は必要です」

「……………」

「それに、必要じゃ無いからと無駄を切り捨てたら、偏った勉強しか出来ませんよ」

そして、それと同時に理解もした、不合理も必要であると。

彼女とのデートは時間の無駄だった、何の価値も無い未来に一切繋がらない虚無の時

間だった。

しかし、その無駄は人の心をほぐしてくれた。

『あたしとのデートでなつき君をとろとろにしてふぬけにしてあげる！』

彼女の口癖だったその言葉。

兄の気を引くため、なつきを陥れようとしたあの言葉。  
今なら理解できる、たとえどれだけ無駄でも、

——それは必要な物だったんだ。